第一種

伽羅先代萩

竹の間の段

奥州五十四郡の領主義綱公、隱居して、御長男鶴喜代丸、幼稚ながら家督定り、乳母政岡に傳かる。政岡、若君を病氣と詐り、男の出入を禁じたれば、諸士の對面叶はず、諸士頭、信夫の庄司爲村の後室沖の井、御膳奉行渡會銀兵衛が妻の八汐、両人若君の御機嫌伺候のため參殿す。乳母政岡二人を迎ふ。沖の井若君に御膳を獻上せんとす。若君膳に著かんとして政岡の一瞥に心づき「飯はいやじや」とのたまふ。八汐召連れ來りし御典藥、大場道益が妻の小卷をして若君の醫脈を檢せしむ。小卷、熟と觀て必死の御脉と申す。並居る女房達愕然たり。沖の井不審に堪へやらず、御座を替へて檢すれば則ち平脉なり。愈々人々不思議の思をなす。何思ひけん、沖の井長押の長刀を取つて天井の板こじ放てば怪しき曲者落つ。沖の井御前、曲者を縛して詰問す。曲者「政岡殿に賴まれて若君を弑せんとす」と白狀す（實は八汐に唆かされたるなり）八汐、曲者の言を質とし政岡と爭ふ。八汐猶は證據物件として鶴か岡の神木の下に埋めありしといふ願文を取り出す。（元より惡黨輩の僞筆なり）政岡窮す。八汐政岡に代りて傅かんとす。若君殊勝にも政岡を匡ふ。沖の井、前後の樣子に注意して老慮一番徐に口を開いて堂々たる辯舌恰も流水の如し。八汐遂に屈眼し小卷を連れて御殿を下る。

（直に政岡忠義の段に續く。）

此の段懲悪の理法を誨ふるに、八汐の奸策立所に露はるゝの脚色を以てしたり。又若君が乳母政岡の教訓を守り、沖の井の勸めし膳を斥けし言動、及び政岡を庇ひし言句、腕白ながら仁慈深きを示す。末段沖の井が正々堂々たる辯護の辭は聽く者をして爽然たらしむるものあり。

伽羅先代萩　政岡忠義の段

（前段竹の間より續く）八汐、沖の井共に御殿を下る。後には政岡、若君の行末を案じて一人物思に暮れ居る折柄、若君も物思はしげに乳母との對話となる。乳母政岡或は褒め、或は訓ふ。若君殊勝にもよく乳母の訓を聞き分く。乳母錦の袋を取り出し、手づから殿中に於て飯を炊ぐ。若君待ち兼ねて空腹を訴ふ。政岡の一子千松未だ頑是なき年配なれども、よく母の教訓を守り雀の歌を唱うて若君を慰む。乳母これに和す。若君、雀の餌を啄み狆の食を貪るを見て羨み給ふ。乳母感に堪へず顔をそむけて泣く。若君悟りて乳母に謝す。程なく飯も炊がれて若君に進む。若君唯一握りの握飯を無上の珍味と思召して食し給ふ。かゝる折柄梶原平三景時の奥方、栄御前、案内に連れられて入り來り、頼朝公より の下され物なりとて菓子折を呈す。千松、平常母の教訓あれば、一間より走出でゝ試味し中毒して忽ち悩亂す。八汐すかさず懐剣を以て千松を刺す。これ毒の工を覆はんとせるなり。政岡少しも動せず栄御前、政岡の從容たる氣色を觀て、政岡は已の子千松と若君とを取り替へ置けるものと思ひ僻みて

（尤も先に大塲道益の妻小卷より聽けるなり）己等の謀叛を打明けて歸館す。後には一人政岡、千松の死骸を取りあげで前後不覺に歎く。樣子を窮ひし八汐、巳等の工を知りし政岡をば生かして置かれずと、懷劍をとつて突いてかゝる。沖の井、小卷を證人として八汐に謀叛を白狀せよと詰問す。證人小卷は惡党輩が夫道益をして毒藥を調合せしめ、然も謀の洩れんことを惧れて道益を殺したれば、妻の小卷は謀叛に方人せし風に見せかけ、謀の始終を聞き知れるを以て、八汐の面前にこれを白狀に及べり。是に於て八汐萬事窮して政岡に突いてかゝりしが、惡の報遂に敵せず、政岡の爲に殺さる。かゝる折柄丈拔群の大鼠（實は仁木彈正幼衛を以て鼠に化せり）系圖の一卷を咬へて現はれ出づ。椽の下に忍びし忠臣松前節之助、小柄の手裏劍を放つ。曲物異形の姿を現じて逃げ出づといふ節。

政岡の忠烈は云はずもがな、千松と鶴喜代とが殊勝なる言々句々、皆これ武士道の發露たり。謀叛に加擔せる八汐が、非業の最後を遂ぐるに至つては、適切に勸善懲惡の理法を誨ふるものなり。

假名手本忠臣藏

四段目叛官切腹の段

盤治叛官、上命により、扇が谷の上屋敷に閉居の身となる。所へ上使として石堂右馬之亟、藥師寺次郎左衛門入り來り、懷中より御書を取り出し「此度盤治判官高定、私の宿意を以て執事高師直を又傷に及び、館を騷せし科によつて國郡を沒收し切腹申付くるものなり」と宣告す。判官兼ねて覺悟の事

とて從容として死に就く。最期の際に家老大星由良之助早馬にて駈け來り、最後の訣別をなす。判官

饌として九寸五分の血刀を由良之助に與ふ。石堂右馬之亟、檢使を了へて歸る。由良之助その死骸を

菩提所に送りて後、諸士の評定あり。或は城を枕に討死を議する若侍あり、或は御用金配分を說く

不忠者あり。結局、由良之助の後圖をなすの議に一決して此段を終る。

忠臣藏中最も深き感動を與ふるは此段と、九段目山科の段となり。副上使藥師寺の罵詈に對して判

官が「兼ての覺悟見すべし」とて大小羽織を脫ぎ捨て、用意の白小袖、無紋の上下、死裝束を見す

る壯烈、判官の衷情を察する上使石堂右馬之亟の同情、殊に本段の主人公たる由良之助が主君判官

の最後に多く他を言はずして「唯御最期の尋常を願はしう存ずる」といへること、何等の悲哀ぞや

御臺所が婦女子ながら判官の切腹を目前に見て些の未練なる言動なかりしは壯、由良之助が若侍

の議を斥けて「足利殿に何恨有つて弓引くべき」は正義。

假名手本忠臣藏　九段目山科の段

大星由良之助、京都山科に佗住居して復讐の機を待つ。或日、加古川本藏行國（桃の井若狹の助の家老）の

女房となせ、――娘小浪を連れて山科を訪ふ。これ由良之助の嫡子力彌と許嫁せし小浪を與入せしめんた

めなり。然るに由良之助の女房お石、とかくいひて諾はず、となせとの間に押問答あり。娘小浪、悲

極まりて泣き、貞女兩夫に見えずとて死を覺悟す。母も使命を全うせざりしを恨み、娘を介錯して自らも死せんとし、今やと太刀を振翳す時しも、表に虚無僧ありて鶴の巣籠を奏す、内より御無用と聲あり。母不審かる時しも内より「祝言せしめんが聟引出として加古川本藏の首を得ん」との難題なり。これ主君判官殿中刄傷の節、加古川本藏に抱き止められ、高師直を討ち洩らしたる主君の御無念本藏にかゝれば、臣としてその本藏の娘を嫡子に娶はすを潔しとせざればなり。となせ親子途方に暮るゝ折柄、先程より表にありし虚無僧「加古川本藏が首進上申す」と笠脱ぎ捨てゝ入り來る。見れば本藏なり。人々驚く。本藏、妻子を後目にかけ、故らに由良之助親子を罵る。お石、憤つて鎗をとり、本藏に突いてかゝる。本藏、お石を足下に踏まへて動かせず。突然、大星力彌走り出でゝ、鎗を拾ひ本藏の脇腹を貫く。これ本藏は首を聟力彌に與へて手柄を樹てしめ、且つは娘の綠組を叶へん親の慈悲より出でし計略なり。由良之助夫婦本藏の衷情を察して婚嫁を許す。本藏懷中より吉良家の案内圖を取り出し聟力彌に與ふ。翌日直ちに山科を出發して江戸に下り、主君の仇を討たんとすといふ節。

此の段お石、となせの問答は一つは義、一つは慈、小浪の詞「貞女兩夫に見えず」より以下總て嫁したる者の一時も忘るべからざる誡なり。殊に此の段の主人公たる加古川本藏が迚も叶はぬ娘の婚儀を全うせしめんために、潔く主君若狹之助に暇を願ひ、忠義ならでは棄てぬ命の白髮首を、聟力彌に得しめんとせる義烈と慈悲、何れか我が大和魂の發露にあらざるべき。

忠臣二度目清書

寺岡切腹の段

大星由良之助以下四十餘人、復讐の大望を成就し、諸家へ預けの身となる。由良之助の家族等は、山科に主人の身の上武運強かれと祈り居る。足輕、寺岡平右衛門の妻おきたは實直に大星家族に仕へ、且つは夫の身の上を案じ居る。折しも門口に案内を請ふ者あり。おきた出で見れば圖らざりき夫平右衛門なり。由良之助の女房お石、悴千代吉共々に義士面々の消息を尋ぬ。平右衛門跪座して仇討の始終を物語り、「面々は本月四日の曉天に故君の御菩提所光明寺に於て潔く切腹し畢んぬ」と、聽くより何れも今更ならぬを驚く。殊にお石は力彌が最期の殊勝さを聽きて嬉し泣に泣く。平右衛門懐中より由良之助父子の位牌を取り出す。お石生きたるものに物言ふ如く、恩愛節義の涙滂沱たり。千代吉未だ頑是なき小兒ながら「父様や兄様の御供せん切腹の仕様はいかに」と、尋ねしに、平右衛門斯くの通りと我が腹に突き立てたり。折から石堂右馬亟の家來金堂孫三郎といふもの入り來り、由良之助殿生前の約束にて、御次男千代吉殿を我主人貰ひ受けたればとて、親子を乘物に移し、おきたは黒髪切つて主君と夫との菩提を吊ふといふ節。

忠僕、平右衛門が主命もだし難く、惜しからぬ命を今日迄長らへしは、寧ろ一死に勝る苦あり。お石親子が夫や兄の最期を聽いて、節義に泣きて未練の涙を出さざりしは天晴武士の妻なり。平右衛

門の妻おきたが忠實に主君に仕へ、夫の最後を見て身を錦流に投じ、主君と夫との菩提を吊ふ心事亦憐びべきものあり。

忠臣義士傳

赤垣出立の段

赤垣源藏、餓所ながら病中の老母と、舍兄夫婦とに此の世の暇を取らんとて、仇計の當日雪の朝に訪ね來る。例によりて熟醉せり。若黨曾平太（實は敵の間者なり）見咎めて切に諫言す。源藏大に怒る。兄源左衞門の妻お繼出でゝ源藏に逢ふ、慇懃常に異なるなし。源藏嫂より衣服を惠まれ、是れを着して奥に通り母に對面す。今日を限りの拜顏と心に思へど故らに「此度朋友の推擧により主取りし遠國へ行かんとす」と、詐る。母佛間を開き、故主冷光院殿吹毛玄利大居士の位牌を出して、切に源藏を敎訓折檻す。源藏之れを空吹く風と聽流して取り合はず。母、怒の聲と共に隔の襖を立て切る、源藏德利を引き寄せて飲み其座に眠る。折から一間より兄源左衞門手槍を提げつゝ「不忠不義の源藏を成敗せん」と無二無三に突いてかゝるを源藏むつくと起き上りて受けつ潛りつ、遂に德利を以て槍を押へ御暇せんと立ち上る。母一間より「重々の不屆母が手討にせん」とて出づと見るしが、我が咽を突きて自刄し、源藏に向ひ「親子一世の暇乞に來りしならむ」と觀破し「汝をして未練の心を斷たんためかく自害せり」といふ。兄源左衞門も「母人の御明察に違ひあるまじ、この上は母が冥途の土産に誠

心を明すべし」といはれて源藏、飛び退きて大望の始終を語る。源左衛門餞別として先祖傳來の手槍を與ふ。源藏勇みて納戸の疊を引き上げ太刀、物の具、小具足取つて著なし、威風凛然たり。母喜び、笑を湛へて遂に死すといふ節。

源藏の母眞弓が諄々として源藏に教訓する件、實に忠義の精髓なり。殊に末段一死以て後顧の憂なからしめし忠烈は鬼神ために哭くの概あり。兄源左衛門及び嫂お繼の深切亦風教上の好資料とするに足るものあり、

忠臣義士傳

彌作鎌腹の段

義士、千崎彌五郎の兄彌作、强慾の芝村七太夫といふ者と約して、弟の彌五郎をば印南といふ豪家に養子せしめんとせしが、弟は大望ある身なればとて肯せず。詮方思案に暮るゝ折から、七太夫入り來りて約束なれば彌五郎を同道せんといふ。彌作事を分けて約束を破談せんと辯疎すれども、七太夫は印南家より百両の周旋料を得居るがため承引せず、果ては武士が立たぬ切腹せんなどと無理を言ひ掛く、彌作は元來の正直者、弟に他言はせじと誓ひはしたれど、せめて之れを言ひ立てなば七太夫も聽き容れんかと、淺果にも今夜故主の仇を報ぜんため吉良家に押し寄せん淺野浪士四十餘人の其の一人に弟も加はり居れば、養子緣組は無益なりと無慙や大望を口外したり。さるに七太夫尙承知せず、

今夕暮六つの鐘までに再應彌五郎に談じて見よとて歸る。引き違ひて彌五郎歸る、彌作始終を語る。彌五郎驚き一大事を知つたる七太夫、住家へ駈込み只一打とあせるを引き留め、大事は明さず只汝が志を確めたるまでなりと言ひ紛らす。折柄暮六つの鐘、弟は暇乞して出發す。程なく又七太夫禪鉢卷の紛裝にて來り、彌五郎を渡せと罵る。彌作斷の印にと彌五郎より受けし五両の金を出す。七太夫怒つて先刻聞きし大望を訴人して褒賞の金を得んと駈け出でたり。彌作かくなる上はと鐵砲をとり只一發に仕留め、己も切腹せんと山刀を拔きしが百姓の身分なれば氣後し、似合の草苅鎌を以て切腹す。所へ女房駈け込み來りて悲歎に暮る。弟彌五郎蟲がしらすか又とつて返し、此の有樣を見て樣子を問ふ。所へ一人の虛無僧入り來り笠脫ぎ捨つれば大星由良之助なり。女房おかや自殺せんとせしが。由良之助に止められ、遂に尼法師となりて菩提を弔ふといふ節。

此の段は風敎上善を勸むると言はんよりは、惡を懲すといふに重きを置きたるものと見るべきか。七太夫が强慾は遂に彌作の彈丸に斃れ、彌作が口業を愼まざりし罪は自ら鎌腹の非業に終れり。語に曰へり「駟も舌に及ばず」と、七太夫幸に彈丸に斃れて大事露れざりしは寧ろ僥倖のみ。但し彌作・百姓の身分にして過を悔い、當に執るべき切腹を敢てしたるは大和魂の本旨に適へり。

太平記忠臣講釋

喜内住家の段

矢間重太郎、美々しき服装にて家來を連れ父の病氣を見舞はんため我家に歸る。父母妻子喜んで迎ふ重太郎故らに曰く「近頃立流な主取りをして今鎌倉に向ふ途中なり」と、父喜内聞咎めて貞女二夫に見ゆず、忠臣二君に仕へずとは、汝が胎内を出づるより汝の骨心に銘じある筈、心の腐りし犬畜生長居せば手討にせんと、烈しき老の怒に、重太郎思案を定め暇せんとす。母、女房家事の不如意を訴へて切に之を留む。重太郎故らに母とも女房とも肉縁を切らんとす。女房、一子太市を抱き來りて、共に夫の心を和げんとす、重太郎聽かず、女房太市を天に突きつけて奥に入る」重太郎熟々と思案し、小柄を取つて太市が胸唯一突に突き通す。父喜内内より聲かけて「重太郎出かしたり」と嘆賞し、金子五十両を路金に與ふ。重太郎も亦大星由良之助より配分の五十両を父に與へ出で立たんとす。折柄内にわつと聲あつて女房おりゑ自害す。其の書置の大要は老父母を養はん爲め肌身は穢さねども、浅間しき辻君の勤をなし夫の疑を受けたるは冥途の迷の種なり云々。その外老父母へ對して心づくしの數々を書き添へたり。喜内夫婦老眼潤む涙をかくして重太郎を送るといふ節。

重太郎が義士仇討の大望をば父母妻子にも知らさじものと故らに詐りて一世二世の暇乞をなせる心事の忠勇義烈。父喜内が「やい重太郎、女は二人の夫を持たず、侍は二人の主に仕ふるを人非人と

いやしむことを云々」より以下數十言忠孝節義の教訓を垂れて餘蘊なし。女房おりゑの親孝行、其の自害するに至れる節烈、書置文の孝心と慈悲心何れも世道の教訓ならぬはなし。

因云、この段は世間通常語らるゝ如く「弓矢は家に傳へても云々」より初むるものとして選定せり

菅原傳授手習鑑　松王屋敷の段

松王の女房千代、一子小太郎とゝもに我が家に隱匿ひ置きし管相丞の御臺所を慰め居る折柄、御上使と呼ばり時平の家來春藤玄蕃入り來り「武部源藏といふ者、北山芹生の里に筆道指南に世を渡り、菅相丞の若君菅秀才を隱匿ひ居る由訴人ありて明白なり。それ故汝に檢分の役を仰せ付くとの御諚なり」と披露す。松王心に決する所あり。謹んで領承す。松王玄蕃と相談の上、多くの組子を手配して源藏の家を取り卷く、玄蕃歸る、女房千代心ならず夫の思案を尋ぬ。松王故らに女房を欺き「御臺の首諸共菅秀才の首を時平公に獻じ官位を望む我が心底なり」といふ。女房悲歎の涙と共に夫を諫む、夫聽かず。千代正體も無く泣き倒れ、小太郎を引き寄せ因果を含めて自刄せんとする刹那、松王一間より出で御臺所を伴ひ出で女房の死を留め、是に已が本心を打明け小太郎を以て若君の身替りにせんとす。御臺所女房共に歎く。小太郎潔く出で立つといふ節。

松王の誠忠は此の段の本旨なり。女房千代が忍びの身の御臺所を慰藉する詞に誠心誠意顯はれてゆかしく、夫松王が本心を知らざるより、その非義非道を翻へさんと一死を潔くせんとせる苦忠、御臺所が小太郎の死を惜む同情、殊に小太郎が小兒ながら喜んで身替とならんとする衷情は忠孝一本てふ日本道德の好範なり。

菅原傳授手習鑑

寺子屋の段

菅丞相の臣武部源藏といふもの、主君の御子息菅秀才をかくまひ、いたはり傅きつゝ芹生の里に寺子屋を開きてしばし匿び居たり。然るに訴人するものあつて、事露はれ、庄屋より饗應と詐はりて源藏を呼びよせ、藤原時平の臣春藤玄蕃なるもの菅秀才の首を討つて渡せよと手詰の催促に及ぶ、源藏諾して歸る。途中寺子の一人を身替にせんと思ひしが、これといふ心當りもなく思案に暮れて我が家に歸る。これより先、さる女房、一人の子を連れて弟子入せるものあり。源藏歸りて其の子を一見し、これ屈竟の身替と心中大に喜ぶ。女房千代夫の氣色の常ならぬを見て不審かり故を問ふ。源藏苦哀を陳ぶ。程なく上使として春藤玄蕃首實檢には松王丸(元菅丞相の舍人なりしが今は時平の臣)兩人して源藏の隱家に入り來り、菅秀才の首を得んとす。松王丸は源藏が身替を立てんかと疑ひ、寺子の數と机の數とを檢む。暫く問答わつて源藏奥より白臺に首桶乘せて靜々と松王丸の目通りに差し置く。首は最初

寺入したる子の首なり。松王丸右傾左斜窺ひ見て「菅秀才の首討つたはまがひなし相違なし」と檢視す。玄蕃松王の言質を證に首請取りて館に歸り、松王丸も駕にゆられて立歸る。源藏夫婦はあまりの僥倖に天地を拜して喜ぶ。所へ最前寺入せし子の母小供を連れて歸らんとて來る、源藏夫婦兼てしめし合せる事とてその母に只一打と切りつけたり。女もさるもの我が子の文庫を以て受けむとすれば、文庫は割れて中より經帷子と六字の幡顯はれ出づ。源藏驚き尋ぬれば門口より最前の松王丸入り來りて、菅秀才樣の身替に立てしは吾々夫婦の中の一子小太郎なり。舊君菅丞相樣への御恩返は此の時と子供を先へまはして此の始末を語るにぞ、源藏夫婦感極まつて泣く。尙松王丸は兼てかくまひし菅丞相の御臺所を御連れ申し、茲に親子不思議の對面をなすといふ節。

因云、此の段、梅はとび櫻はかるゝ世の中に、何とて松のつれなかるらむ。といふ菅丞相の御歌を世人通常何ととての反語あるをば氣づかず松王を恨めるが如く思ひ誤れるを辯じたるは面白き趣向なり。

白太夫の子三人兄弟の中松王一人不忠と見るしは松王が苦肉の計略にして故らに敵に荷擔して菅公の爲に圖れるなり、而して誠忠無二の松王が一子小太郎を身替りとせる義烈、小太郎が幼少ながら喜んで若君の身替となり、潔く首差し伸べたる哀情。源藏夫婦が身命を賭して若君に傅ける苦衷、皆これ臣たるものゝ龜鑑とするに足る。源藏が他人の子を身替とし、然も其の母をも一刀の下に斃

さんとしたるは時代思想と見ば止むを得ざることなるべし。大義親を滅すとは之の謂か。

花の上野誉石碑

志渡寺の段

坊太郎の乳母お辻が志渡寺の靈場を穢したりとて、惡坊主共が責め苛むを、槌谷内記（坊太郎の叔父）の妻菅の谷のとりなしにて、坊太郎が乳母を連れ泣々立て行く所より始まる。

菅の谷、坊太郎とお辻とを見送りつゝ殿に入る、折柄腰元の注進あり、こは今日槌谷内記と、森口源太左衛門（坊太郎の敵）とが、御前試合の勝負を知らせの爲なり。

注進は内記の運拙くして負けたりと報ず、菅の谷口惜涙に暮るゝ時しも、内記、方丈、森口、弟子共數多志渡寺に入り來りて酒宴あり。坊太郎酌勸に出で、内記に酌して源太左衛門に酌せず、森口大に怒り、坊太郎の首筋とつて引据ゑたり。然るに坊太郎の袂より桃の實二三個こぼれて出づ。森口は思ふ壺、抑も當寺の桃は名物にして、殿に献上濟まざる間は何人と雖も指ざしもならぬ桃なりとてそを言立にして坊太郎を廊下へ蹴落す。乳母お辻、駈け出でて坊太郎を庇ひながら桃を盗みし事の大罪なることを陳じて森口に詫ぶ、森口聽かずして一刀の下に切り棄てんとす。方丈其手を取り、果物と人命との輕重を論じて森口を説破す、森口止むなく惡口雜言して歸る。後にお辻懇々諄々坊太郎に向つて淺ましき盗み心を出すまじきを教訓す。坊太郎啞のかなしさ口言ふを得ず、お辻金比羅大權現に

祈誓をかけて自害す。一間の内より、槌谷内記、菅の谷諸共顯はれて坊太郎に口業を酢し、乳母を引導せしむ。（是迄内記の計ひにて坊太郎を作り啞とせしなり）お辻驚き喜ぶ。内記は今日の試合に勝を森口に讓りし理由を說き、お辻が三七日の斷食艱難の驗顯はれて、坊太郎が劍道の上達驚くべきものあり冥途の土産に見よとて、家來の數馬十藏と劍術の試合をなさしむ。時しも金比羅大權現ありありと松の梢に現れ給ふ。お辻完爾として永く眠るといふに段を終る。

この段槌谷内記夫婦、兄田宮源八が非業の最期を遂げたるを憐み、その子坊太郎をして仇討をせしめんと焦心苦慮せる同腹の友乳母お辻が一身を犧牲とせる忠烈、殊に坊太郎に「紙一枚塵一本人樣の物を盜む樣なさもしい心止めて下され」と敎訓せる數十百言は平易に說かれて始んど餘す所なし眞に通俗敎育に推奬すべき金言なり。坊太郎が叔父内記に啞となつて、口業を守れと言ひ聽かされたるを、乳母が最期の際に叔父の許のある今迄、守り通したるは何等の壯烈鬼神爲に泣くの如きは寧ろ形容の及ばざるものなり。

金比羅御利生敵討稚文談

百度平住家の談

百度平の母お辻、主君田宮新左衞門の遺族の身の上行衞を案じ、且つは孝行の悴百度平が乞食に身を窶し、若君姉弟の行衞を索むる辛苦を思ひやり、病苦の身ながら金比羅權現に祈誓をかけ居る所へ、

柴刈の長作といふ老爺深切にも有田密柑をもつて見舞ひ、種々に慰めて歸る、後にお辻金比羅權現に密柑を供へながら、述懷あり。所へ百度平歸る、お辻首尾を問ふ。百度平涙と共に迚も敵は討たれまじと嘆く。母は忰を勵まさん爲め、故らに怒つて其の未練を叱りしが、病に疲れて遂に眠る。百度平風引かすまじと布團を被ひ、獨り思案に暮るゝ折柄、表に子供の順禮歌聞ゆ。百度平同情して茶を與へんと門口へ出づれば、圖らざりき若君坊太郎と、その姉君お梅樣ならんとはお辻も起き上りて主從久々の對面をなす、お辻は若君姉弟に母上の行衞を問へば、母は生田川にて人手に討たれたりと答ふ聞いてお辻持病の癪を疾む、皆々の介抱に正氣づき、伯父新三郎樣はと問へばこれも殺されたりと答ふ。親子は驚きしばし悲歎に暮る。やうくにお辻、兩人をして佛前に禮拜せしむ。折柄突然數多の組子亂れ入りて子供二人を引立てんとす。仔細を聞けばおとめ山獻上の密柑を盜みし科なりといふ。お辻自害して科を引受く。所へ坊太郎の伯父左島之頭現はれ、「自分が子供兩人を匿隱ひ、武術の稽古に怠りなし、やがて本望遂げさすべければ心殘さず成佛せよと、坊太郎もお梅も百度平もお辻が冥途の土産にと敵討を擬して勇む。お辻喜んで死すといふ節。

百度平が忠義の爲、孝道の爲粉骨碎身する件り、お辻が病と詐りて火の物を斷つて、金比羅權現に誓する忠義又その子百度平を奮勵せしむる言句共に懦夫を起たしむるに足る。

蝶花形名歌島臺

小坂部館の段

段中の主人公小坂部音近は日本無雙の勇者にして、又軍略家なり。元大内氏の臣下なりしが、故ありて出仕を罷め、閑を樂めり。眞柴久吉大内氏を攻むるに當り、音近を味方に入れんとして、加藤正清に事を謀らしむ、これ正清は音近の姉娘（實は兄元胤の遺子）葉末を妻としたればなり。一方大内義廣も亦音近の娘眞弓が聳たる出海左衛門宗貞を介して音近を味方に入れんとす。實に音近の進退は、眞柴大内両家の成敗に拘るべかりしなり。この大任務を負へる正清と宗貞との謀は、實に符を合したるが如く、各々武士の義理より其妻を離別し、其子を使者として音近の許に遣る。

音近も亦武士の節義を重んじ、姉娘の子笹市には鋭刀を授け、妹娘の子松太郎には鈍刀を授けて眞劍の勝負をせしめ、勝ちたる方に味方せんとす、其の勝負最中鼓を鳴らして心をまぎらし、勝負終るや自刄して、武士の潔白を物語るといふ節。

この段、松太郎及び笹市が、子供ながら祖父音近を味方に賴まんと大切の任務を負ひ、若し能はざれば切腹せんといふ殊勝の詞、音近が武士道の節義と潔白とを重じ、恩愛の縛を斷つて自害し、其の壯烈なる最期の言々句々血垂り肉灑くるの慨あり。兩使の使命全からずして然も全きを得たりといふべし。義理と人情と衝突する場合、武士道のある所義理は常に人情に克つ、此段實に其の典型

なり。

因みにこの段の人物複雜なるを以て、段中の人物を表示すべし

元胤……加藤正清（久吉の臣）―笹市

小坂部兵部音近―葉末

眞弓

出海左衛門（義廣ノ臣）―松太郎

花雲佐倉曙　下總屋（宿屋）

佐倉總五郎以下、佐倉領七人の大庄屋が、下總屋といふ宿屋に逗留し、管領家へ直訴を議し、惣五郎其の任に當り、六人の庄屋と別の杯を交す。後に惣五郎、故郷なる妻子の身の上を思ひに焦るゝ折柄袖乞姿が一人の稚子を連て惣五郎に合力を乞ふ。惣五郎不憫に思ひ、之れに惠み、その身の上を問ふ。袖乞は下總佐倉、桝屋五兵衛とて人に知られし者の老母なるが、伜は無實の罪にて御國を追放せられ、少しの縁を手寄と此の鎌倉に來りしが、伜の病氣に止むなく合力を乞ふ者と知られたり。惣五惻隱の情に堪へやらず、あり合ふ財布を拂つて惠み、今日の人の身の上は明日の我が身かと涙に暮れ、

せめては我が妻子に縁を切り憂目を見せまじものと、直訴の日限に尙四日を殘すを幸ひ、往復三十里道中安全を觀世音に祈りて故郷に歸るといふ節。

この段惣五郎が六人の庄屋と誓つて、直訴の大役を一身に引き受くる義烈、袖乞に對する惻隱の情何れも人の龜鑑とするに足る、次の惣五郎住家の段に詳說すべし。

花雲佐倉曙　惣五郎住家

惣五郎の妻おさん、子供と共に夫の身の上を案じ、神佛に祈誓をかけ夫の開運を祈る。惣五郎は鎌倉より妻子に此の世の別れを告げんものと、人目を忍び夜道を辿りつゝ我が家の門口に來り、妻の名を呼ぶ。妻立ち出でゝ嬉し涙に暮る。夫も妻が留守中の勞を謝し、今度の事は管領家へ直訴するより外思案はなし。さすれば强訴の罪いや深く、罪妻子にかゝるは勿論、かるが故に夫婦親子の縁を切らんために立ち戻りしといふに、おさんは妻の義として情として共に死せんと乞うて止まず。時過ぎて出立せんとし、子供四人に別を告げんとす、子供は頑是もなく父の歸宅を喜ぶ。

夫婦は愛着の縛脫せんよしもなく、悲歎に暮る。惣五郎は惣領の惣平に理をせめて訣別を納得せしめ門出の盃、心には別れの盃とりかはして出發す。入りちがひて喜右衛門といふ男、最前よりの樣子を立聞、惣五郎を捕へんと後を追はんとす。女房おさん、詐つて喜右衛門を支へんとす。喜右衛門おさんに

當身をくれて後を追ふ。やゝあつて女房蘇生し、夫の身の上心元なしと。これも亦後を追ふ。惣五郎渡し場に到れば喜右衛門既にありて通さじ通らんと互に爭ふ。惣五郎喜右衛門に組み敷かれ、既に危く見えける所に女房駈け來りて夫に加勢す、所へ渡し守の甚平といふ者櫂提げて走寄り、喜右衛門の脇腹を丁とばかりに當身を入れ倒るゝ際に、惣五郎起き上りて両人に謝し、本街道は危しと甚平の好意に櫓を押さしめて鎌倉へ行かんとす。喜右衛門蘇生して尙も惣五郎を捕へんと船に飛び乘る、甚平再び櫂にて薙ぎ倒し、浪の底に沈めぬ。惣五郎は女房と水陸の別をなすといふ節。

佐倉惣五郎が義民として一身一家を顧みず、法を犯してまでも世の爲に盡したるは、今日神と祀られ善く人口に膾炙したることなれば今更に言はず。

唯今日の世と時代思潮の異なるあれば、直ちに採つて則とする能はざれども、教育の如何によつては必ずしも今日と矛盾するものにあらずと信ず。妻おさんが健氣にも夫を勵まし、「大事の身をもつて暇乞に遙々と戻らしやんした御心底お案じ申す」は、何等の節烈、惣領の惣平以下四人の子供が孝行心、渡し守の甚平が分に適ひし忠義の働き、皆これ世道人心に有益なるもの、喜右衛門が非業の最期を遂げしも懲悪の道に適へり。

花雲佐倉曙

舅儀作切腹の段

舅儀作、娘や孫どもと共に宗五郎の首尾善かれと留守せる所へ、印幡村の喜右衛門といふ名うての悪者來りて宗五郎を悪様にいひ、はては大馬鹿者よ大罪人よと罵倒す、女房おさん聞きかねて口論す。喜右衛門遂に去る。後に親子は宗五郎の身の上を案じつゝ寢に就く、夜半過ぐる頃宗五郎忍んで我家へ歸る、親子喜んで手の舞ひ足の踏む處を知らず。宗五郎舅と女房とに頼みたき仔細ありとて、故らに詐りて自分は今回の訴訟を止め、江戸に女房を得たれば、舅嫁の縁を切つて貰ひたしといふ。二人驚き共々に理をせめ、事を分けて飜心せらんむ事を諫む。宗五郎せら〳〵笑ひて聽かず。加之女房に難題を言ひかく。舅儀作突然切腹す。夫婦驚き支へんとす。儀作述懷す。宗五郎是非に及ばず已が本心を打明け全く卑怯未練の歸國にあらず、罪を遺族に殘さぐらん爲心にもなき離縁を言ひかけたり來る廿日は將軍徳川家綱公上野東叡山へ御佛參なれば、其の期に乘じて訴せん覺悟なり」と語るに儀作「さても健氣な心や」と喜び、遂に絶命す。宗五郎夫婦孫宗吉悲歎に暮る。宗五郎氣を取り直して出立せんとす。さすが親子の愛着に引かれて一進一退千々に心を碎きしが、人のため世のためと思ひ返して一さんに東をさして引返すといふ節。

宗五郎が世の爲、人の爲に一身を犧牲として盡す義膽は武士も及ばぬ丈夫として崇敬に値す、舅儀作が一死以て宗五郎の未練の心を飜さんとせる赤誠女房が夫の變心を返さんと懇請せる眞心、又「お仕置なら俱にお仕置、親子四人未來まで連立つて行く氣云々」は至誠、至誠も是に至りて眞に機微

に入る。

平假名盛衰記

逆櫓の段

旭將軍義仲粟津の一戰に斃れ、一家臣樋口次郎兼光仇を報せんと焦心苦慮し、攝州福島の船頭權四郎の入聟となり、名を松右衛門と改め逆櫓を仕立て、範頼義經の舵子となつて二人を討取らんと謀る。ある日お筆といふ女、笈を持つて權四郎の孫松右衛門の庶子を貰はんと乞ふ。その仔細はこの段の前段にある事にして、義仲の敗戰後、後室山吹御前は、侍女お筆に嫡子駒若君を守らせ、共に大津の宿屋に仮宿す。其の時權四郎も娘およしと共に、孫槌松を連れ四國順禮の爲め同じ宿に泊り合はせり。然るに其の夜梶原の家來番場忠太、大勢引連れ駒若君を捕手に向ふ。其の騷ぎに槌松と若君とを取り違へ、槌松は敵のために首討たれたり。山吹御前も悲しさに眩暈して身まかり給ふ。お筆笈摺にある所書をたづきに今松右衛門の宅を訪れしなり。權四郎長々の物語を聽き、大に怒つて町人でこそあれ孫が敵、首にして渡さんと苛立つ、松右衛門若君を小脇に抱き、父權四郎に若君の命乞をなす、父聽かず詮方なく松右衛門若君が朝日將軍の御公達なること、自分は樋口次郎兼光なることを名乘りければ、權四郎親子は荒肝取られて呆然たり。樋口理を分け、情をせめて歎願す。爺、両眼に涙を浮べ喜んで之を諾し、懇ろに槌松の追善をなす。

時しも又六、富蔵、九郎作三人連にて、逆櫓の稽古に來る。松右衛門懇ろに教ふ。然るにこの三人は梶原の廻し者にて、松右衛門の謀略を數へて一度に打つてかゝる。松右衛門實名を名乘りて、三人を粉微塵に踏碎く。間もなく四方八方より源氏の軍勢押し寄す、權四郎駈け出でゝ訴人す。暫くして畠山庄司重忠權四郎に案内せしめて入り來る。權四郎が訴人したるは若君の槌松を助けん爲、重忠も其意を諒し、仁義の繩を以て兼光を縛す。樋口莞爾と腕を廻して縛につくといふ節。

樋口次郎兼光が亡君の怨を報ぜんと苦慮せる誠忠は、本文にもある如く晉豫讓が身を寠し敵襄子を狙ふに比すべく、お筆がかよわき女の身を以て若君を守る苦忠は何にか譬ふべき、權四郎が聟松右衛門に武士道を立てしめたる眞情、畠山重忠が仁あり、義あり情ある處置は、實に花も實もある日本武士の典型なり

近江源氏先陣館　和田兵衛使者の段

佐々木兵衛盛綱の一子小三郎盛清、十三歳にして初陣に出で、同年の甥小四郎高重を生擒りて大功を建て、時政公の感狀を得、諸人に賞揚せられつゝ四人を率ゐて歸館す。母早瀬雀躍して喜ぶ。祖母微妙表には俱に喜ぶと雖も、小四郎も亦己の孫なれば片身替の悲歎は情の常なり。捕虜となれる小四郎健氣にも、勝負は時の運なり、早々首を討たれよと謂ふ。祖母微妙斷腸の思をなす。折柄敵の侍大將

和田兵衛秀盛坂本城の使者として、盛綱に對談せんとして來る。盛綱出で迎ふ、秀盛曰く、「使者の趣餘の義にわらず。今朝その許の子に生捕られし高綱の一子小四郎高重を御返し下されたし」との義なりといふ。盛綱嘲弄して諾はず。秀盛已が首と代へんと不敵の顏色なり。盛綱理を以て辨じ、強ひて所望ならば我にも覺悟ありと刀に手をかく。秀盛曰く、両雄爰に相戰ひ、互に命を殞さんは兩軍のために甚だ惜むべし。我はこれより時政公の陣所石山に赴き、直談して小四郎を所望せんと立ち上り、敵陣鎧武者の中を傲然として出で行くといふ節。（次は直ちに小四郎思愛の段に續く）

小四郎、父高綱の計略を就さむため、故らに敵の手に生捕らる〻殊勝さ、鬼神も泣くべし。和田兵衛秀盛、佐々木盛綱両雄の豪氣と勇氣實に懦夫も起つの慨あり。

近江源氏先陣館　盛綱館

佐々木盛綱母に向ひ囚人として我が家にある甥の小四郎をば、今宵の中に手にかけられたしと請ふ。小四郎は高綱の子にして母の爲には孫なり。母の曰く、最前我が君より囚人をば大切にせよとの御諚ならずやと言ふ。盛綱曰く、さればこそ殺さざるを得ね。北條殿の諚意は小四郎を生け置きて人質とし、親高綱を味方につけん計謀なるべし。よしさはなくとも弟高綱子故に不忠の名を流さんは家の爲殘念なれば、是非共小四郎に腹切らしめ給はれと理をせめての請に母承引す。

此夜小四郎の母、篝火盛綱の館近く慕ひ來りて白羽の矢文「名にしおはゞ逢坂山のさねかづら人にしられで來るよしもがな」と、いふ古歌の謎を小四郎に送らんとして、却つて盛綱の妻早瀬に拾はる、小四郎母を慕うてぬきあしゝて立つ。祖母微妙小四郎を呼び止め千々に碎くる思を悼へて小四郎に引出物せんとて、無紋の上下に九寸五分を添へて出す。小四郎取り上げ熟々見て死ねとの意を悟りしが故らに未練を裝ひて逃げ廻る。折柄山風遙に陣鐘、攻太鼓、小四郎の母早瀬駈け入りて小四郎を取返さんとす、三郎兵衛盛綱小四郎を引抱へて立つ。間もなく注進あり。佐々木四郎高綱我子を取られし憤より自身馬を出し、遂に榛谷十郎に討留められたりしと、程なく大將軍時政公御成ありて高綱の兄盛綱をして、弟の首を實檢せしむ。後より小四郎窺き見て「父樣嘸や口惜からむ童も後より」と言つゝ氷の刃を突き立てゝ自害す。盛綱も亦弟の首に相違なき旨を言上す。時政喜んで歸館あり。これ皆佐々木四郎高綱の、計略にて時政公に全くの膺首を得しめたるなり。後に盛綱篝火に小四郎への面會を許し、小四郎の忠義を賞す。盛綱主君を欺きし申譯に切腹せんとす。和田兵衛秀盛現はれて鉄砲を以て鎧櫃の内に忍びし時政の隱目付榛谷十郎を射留め、盛綱の自害を止むといふ節。

佐々木四郎高綱の一子小四郎、父の計略を全うせん爲、故らに盛綱の子小三郎に生捕られ身怯を見せ、今ぞといふ際に潔く切腹したるは忠孝二つながら全き壯烈の行爲、盛綱が弟高綱及び甥小四郎の苦衷に感じて、其の計略を全からしめしは、骨肉の友愛として人情の機微を穿つもの、其の首實

撿に主君を欺きしは不忠に似たれども、後段和睦調ふに及んで恕するに足るべきか。

義經腰越狀

泉三郎館の段

五斗兵衛今や浪人となりて泉三郎の館に食客となり、酒に湎れて家に歸り、筋禮合はぬ囈言をいひつゝつゝ又樽を傾けんとす。女房と娘の德女涙と共に諫むれども、聽かず。女房懲しめのため强ひて離緣狀を書かしめ娘を伴ひ出でんとす。泉三郎の妻高の谷、醉どれ連れて出でよと罵る。五斗兵衛の妻聽かずして爭ふ。高の谷家來に命じて五斗兵衛を叩き出さんとする一間より泉三郎我れに思慮ありと鉄砲提げ火蓋を切つて空鉄砲を放つ。響に五斗兵衛凛乎として立ち上り、鉄砲の五音の調子を判ず。泉三郎賴しく思ひ相共に具足鎧ひて戰場に向はんとす。適猛將なりけり。關女(五斗の妻)興さめ顏、高の谷を介して再緣を請ふ。娘德女恥しさに自害し母の淺ましき心を戒みかつ歎き且諫む。母悔悟の涙と共に自害せんとす。泉三郎夫婦これを留め關東方に捕はれし兄大三を奪ひとり夫に手渡しせば、其の功によりて二度結ぶ妹脊の仲人せんといふに、關女勇み立ち最前の鉄砲を小脇に挾み鎌倉さして出發すといふ節。

此の段五斗兵衛が泉三郎と一旦約せし誓言を變せざりし信義は富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はざる大丈夫といふべく、五斗の妻が輕卒にも夫に離緣を迫り、覆水盆に還らざる悔悟を見しは世

道のため良き誠といふべし。唯五斗兵衛の娘德女の自害は局面の變化を多からしめんとせる作者の趣向なるべし。

祇園祭禮信仰記　是濟屋の段

この段は前段の續きにして、新作の訴人により代官十河軍平といふ者、若君を召捕に來る、親子若君を隱してさる事なしと爭ひしが、下人新作の訴人なれば如何とも詮方なき手詰となれり。若君は豫て乳母の敎へしは是なりと潔く親子の者に謝し捕はれんとす。親子不憫に堪へずして泣き凋る。十河軍平荒々しくも、若君を引き立てゝ行く。是より先、主人是濟、借金のため代官所に引かれ行きしが、この所へ娘の死骸を昇せて歸宅す。女房留守中の出來事を語る、是濟驚き、其の死骸は娘お智惠なり若君を奪はれたるは無念殘念と齒噛をなしゝが、娘の死骸未だ呼吸に通ふ六脉切れざれば大明流の秘法を以て一度物を言はしめんと、秘藥を出し口中に吹き込みしに不思議や勃然と起き上り若君を慕ふ情切なり。お智惠再び瞑目せんとする時物語りて曰く「若君といふは眞は若君にあらず。我三好家に奉公中修理太夫存保殿に思はれ設けし實子なり。當時室町の御所に於ても御臺樣に男子の御誕生ありしが程なく御逝去ありしより、祖母君慶春院樣の指圖により、我を子をさしあげ、我は乳母として、傳くうち松永大膳の謀叛よりこの有樣なり」と。終に息絶ゆ。

かゝる所へ眞柴筑前守久吉是濟に直談ありて御入來なるぞと注進あり、是濟驚きて出迎へば、豈圖らんや絶ゑて久しき此下東吉なり。東吉土に額いて曰く「松下嘉平次之綱殿、先は御勇健の體を拜し恐悦に存じ奉る」と挨拶す。（是濟は實は松下嘉平次の隱遁の名なりしなり。）嘉平次大喝一聲、東吉の罪を數へて怒嘲す。東吉一も逆ふことなく、只管、低頭平身す。これ東吉未だ嘉平次の草履取たりしとき、胴丸の鎧代六兩を横領して出奔したる罪あればなり。世を拗者の松下嘉平次、何思ひけん、東吉の年季証文を引裂き遙かに末座に下つて、眞柴筑前守久吉に歎願することありと一間に通して饗應す。所へ金貸小次兵衛來りて督促嚴し。新作褒美の千兩箱を持ちて歸り、小次兵衛に渡さんとす。是濟之を止め、我小次兵衛に返す金ありといひつゝ割腹す。女房、娘、新作驚き歎く。是濟新作を近く招き、過失なりと雖も衷心の厚意を感謝し、娘お露を娶はしむ。是濟尚も巳の素性を語り、松永へ連判せしは、我が一生の過なりと懺悔す。小次兵衛この樣子を訴へんと出づるを代官十河軍平、實は加藤清正之れを捕ふ。久吉悠然と顯はれ新作の厚意の金を小次兵衛に取らしむ。小次兵衛金を受取り立たんとするを再び引き止め、汝吾に約束せる首をおこせと逼る。これ久吉が子供の時小次兵衛と出世の約束に首を賭けしを以てなり。正清小次兵衛の首を取る。久吉傷負に向ひ引出物せんとて輝若を出し與ふ。妻、娘、共に大に喜ぶ。久吉この輝若を養つて子となす、新作髮を切つて若君のお伽役となる。これ曾呂利新左衛門なりといふ節。

此の段、眞柴筑前頭久吉が松下嘉平次の舊恩を忘れず、是に主君の在家を搜し、其の難を救ひし美談は世道のよき教訓といふべし。新作の忠實、是濟の義烈、共に稱するに足る。

奥州秀衡有髮婿

秀衡館の段

秀衡に四子あり、内三子は北の方の生む所にして、他の一子泉三郎は妾信夫の出なり。秀衡四子の中より若君源牛若丸に仕へて忠勤を抽んずべき者を選ばんと欲し四子を試む。内三子は意志薄弱なれども。三郎獨り父の問に對しその意に逆うまでも侃々として正理を主張す。秀衡遂に母及び衆の面前にて三郎を足蹴にかけ折檻す、三郎自害して父の怒を解かんと決意し、母信夫も亦身しき腹を借りたる故にと、輕蔑せられ、三郎と共に自害せんと決心す。秀衡益々怒りて一刀の下に三郎を切り放たんと。三郎刀下に從容自若たり。是に於て秀衡、三郎の膽勇に感じ、刀を棄て〻三郎を賞し、牛若丸に對し三郎を臣事せしめんと請ふ。牛若丸喜び信夫母子に祝盃を賜ふ。北の方は三子の身怯なるに耻ぢて自害す。かゝる所へ佐竹兄弟より書信あり、秀衡牛若丸に向つて曰く、北國は勿論甲信まで味方に付きたれども、出羽の佐藤庄司忠政のみは從ふ模樣なし用心あれと、牛若丸曰く佐藤庄司は父義朝と親善あり、予往きて說服せん、若し聽かざれば彼を首にせんのみと、秀衡之を止めて曰く、彼久しく我に恨を懷けり。殊に彼は剛慢にして二子繼信忠信は古今に稀なる剛勇なれば、却て若君を害せんや

も測り難し、善く熟考せられよと。この時三郎の母、信夫、進み出でゝ曰く、妾この使命を全うせん今は何をか隱すべき妾は佐藤庄司の娘なり、往いて先つ母を說き、父をして和親を圖らしむべし。但し一命を棄てんは固より覺悟する所なりと、熱誠面に現はる、秀衡大に喜びこの大任を委ぬ、信夫母子は互に別を惜みしが信夫意を決して出で立つといふ節。

梅檀は二葉より香ばしといふ、泉三郎未だ年若くして侃諤の正義、父の面をかかして爭ひ、白刃の下泰然として動せざる膽力は大に學ぶべし。三郎の母信夫身を棄てゝ大任を負うて立つ勇氣、亦女丈夫といふべし、又秀衡の北の方その三子の不肖を恥ぢて自刄したるは、人の母たるものゝ鑑とはなしがたきも人の子たるものゝ敎訓なり。

三日太平記

松下住家の段

武智十兵衛光秀主君を弑し、反逆の身の倚るに所なく妻皐月と共に、舅松下嘉平次の家にかくまひの身となる。眞柴久吉注進によつて之れを知り、數萬騎を以て圍まむとす。是れより先、皐月の弟一作、先駈して光秀を討たんとす。皐月之を支ふ。討たん討たせじと互に爭ふ折柄、久吉の討手の大將櫻井小新吾押し寄せ、嘉平次に向ひ光秀を搦め出せと呼ばる。嘉平次は不敵の老人なり。假寢ながら高笑ひして、大盜人の猿冠者に自ら來れ、睨殺してくれんずと大盤石少しも動ずる氣色もなし。討人の者

共大に怒り、既に踏込まゞとする折柄、暫く待てと眞柴大領久吉現はれ出で懇懃に嘉平次に挨拶す。これ昔久吉が兵吉といひし頃初めて嘉平次に仕へし恩あればなり。然も桶皮胴丸の鎧を求むる爲預りし金子七両を横領し出奔したる罪あれば、昔の草履取りとしての禮儀を守れるなり。卽ち茲に胴丸を調へて持參し罪を謝す。嘉平次尙も怒つて、期後れたりとて鎧櫃を踏破れば胴丸ならで内よりは光秀の一子重次郎顯はれ出づ。嘉平次案に相違して驚き、悉く久吉の罪を許し、年期證文を返し與へ、遙かに庭に飛び下つて大領久吉を上座に直す。秀吉嘉平次に命じて光秀を出さしめんとする折柄、一間の内より一宿の返禮に我が一命を進上せんと光秀割腹す。又一間より以前の一作走り出でゝ光秀の首を討落す。久吉感じて一の功立ちたれば、臣下として小西彌十郎行長と名乘らしむといふ節。眞柴久吉が舊恩を忘れず禮を厚うし、辭を卑うせし禮儀、松下嘉平次が久吉に年季證文を返して後遙かに座を退きしも武士氣質の禮讓として心地よき事ともなり。又光秀が罪を妻子に及ぼさざらんために勘當したると、重次郎が假令主殺しの子と呼ばるゝも尙父の子たらんを類うて切腹せることと親の慈悲と愛情とを表して切なり。

鏡山舊錦繪　長局の段

鎌倉管領足利持氏卿の北の方に仕ふる中老尾の上の下女お初、主人が昨日惡局の岩藤のために散々に

辱しめられ剩へ草履にて額を打たれたるを殘念がり、せめては主人を慰めんと御下りを待つ。やがて尾上打萎れて歸り病と稱して臥す。お初慰藉至らざるなし。お初蔭かに思ふ樣、主人尾上若や短慮も出でんかと、忠臣藏の判官を引例して間接に諫言す。尾上お初に湯藥を命じ、其際に書置を書し打たれし草履と共に文箱に入れ、我が里方に持參せよと命ず。お初蟲が知らすか心に進まざれども、强ての命に止むなく主人の御身恙なかれと神佛に祈誓して出で行く。後に尾上悲歡の涙に暮れお初の忠實を謝して自刄す。一方お初は途行人の噂を聞き、烏啼の惡しきに胸騷して文箱を開封すれば、草履と書置、驚き周章して取つて返せば、早や血に染まれて締れたり。お初死骸にとりつき泣くばきしが氣を取直し、懷劍執つて奥御殿に駈け入り敵岩藤を刺し殺して主人の仇を報ずといふ所。

此段、徳川時代には、毎年三月諸家の奥女中宿下りの時節に於ては、必らず演ぜられし由にて、主人に忠實なる言句所作一として婢僕の龜鑑にあらざるはなく、寓話を以て主人を諫むる衷情誰か一掬の涙なからん。中老尾上が岩藤のために罵詈せられ、而も草履を以て頭を打たれしをも忍びし克己忍耐はお初の言葉にもある如く、忠臣藏の判官に勝ること萬々なり。

源平布引瀧　實盛物語の段

木曾義賢の後室葵御前、近江の百姓九郎助といふ者に隱匿はれ出産の日を待つ、九郎助の甥矢橋の二

惣太といふ者の訴人により、平家の士瀬尾十郎、齋藤別當實盛両人にて生捕りに來りしが、九郎助の歎願と實盛の頓智により葵御前は救はる。瀬尾十郎心に思ふ所ありて家を辭せしが、家外に隱れて樣子を窺ふ。葵御前九郎助の拾子なる小まんの一子太郎吉を伴ひ出でゝ實盛に面會す、實盛は元源氏の士なり。

話頭轉じて九郎助「今日湖水草津川の口にて漁し、女の腕を得たり。掌中に白絹を握れり。何人にも離たざりし白絹太郎吉の手に容易く離れ、よく〳〵見れば源氏の白旗なり」と。葵御前九郎助夫婦も不思議の思をなす。實盛「われこの腕に覺ゑあり。某矢橋にて宗盛卿竹生島詣の節、船中より切り落しなり」と語る。九郎助夫婦其の年頃を問ふ。實盛「年は廿三四、名は小まん」と語るや夫婦驚き泣き叫ぶ。九郎助歎を止め仔細を問ふ。實盛物語つて曰く、「扨も汝等が子なりしか、我宗盛卿と共に勢田唐崎へ漕ぎ行く所に、矢橋の方より廿有餘の女口に白絹を咥へて抜手を切つて游ぎ來り、平家の船とも知らず上らんとす、能く見れば源氏の白旗なり、我今平家なれども白旗を平家に渡し、源氏を埋木となさんに忍びず、肘を切つて水底に沈ましめしが、さても其の白旗太郎吉の手に入りしも不思議や」と感涙を催す。夫婦これを聞き我が子に手柄させたさに魂魄片手に籠れるかと悲歎に暮る。太郎吉突然母の敵と實盛を睨む。實盛健氣に感ず、折柄娘の死骸を舁ぎて來る。太郎吉歎き此手を接ぎてよと泣き廻る。實盛雙手を胴に接げば不思議や、息吹き返し太郎吉を抱き、只一言をいひつゝ遂に全く絶

命す。夫婦實盛に向ひ「この子は吾等二人の眞の子にあらず、堅田の浦に棄てありしを拾ひしにて、懐には金刺と銘を打ちし匕首ありき」と物語る、葵御前只ならぬ身に悲しみ餘りてか、俄かに御産の惱みありて夫婦に介抱せられ、安々男子の誕生あり。父義賢の稚名を直ちに駒王丸と名け、太郎吉を以て家來となす。實盛就成して母の手を塚に築き手塚太郎光盛と名乗らしむ。御臺氣色を變へさせ給ひ太郎吉の母は平家方の娘なれば一矢の功を立てし後ならではとて諾はず。實盛尤至極なり。然らばこれより義賢の御生國信州諏訪へ立越ゐらるべし。御供は九郎助夫婦と勘ム、折柄瀬尾十郎再び顯はれ出て、さはさせじと爭ひ、駒王丸を生捕らんとす、實盛宥ひれども聽かず、この有樣を見たる太郎吉母の讓りの九寸五分を以て十郎を突く。十郎故らに太郎吉に突かれ、葵御前に向ひ今ころ太郎吉を御家來となし下さるべしと願ひ仔細を物語りて曰く、小まんは實は我が子なり、捨てし娘の追善の爲め孫の太郎が出世の爲め、吾が一命を棄つるなりといふ。太郎吉は再び實盛の取執にて駒王丸の家來となる。而して後年木曾義仲の四天王として、齋藤別當實盛の黑染の首討たるは、實にこの手塚太郎光盛なりといふ節。

九郎助夫婦の親切、小まんの忠烈、實盛の仁義、太郎吉の勇壯、總て敎訓となすに足る。

東山殿幼稚物語

山名宗全館の段

幼君足利義政(年十三)、山名宗全の館に隱匿はる。細川勝元計略により、山名家より養ひせし主税(年十三)を以て己に代へ、義政公の打手に向はしむ。山名持豐夫婦は實子主税が打手に向へるを見て種々に懷柔せんとすれども、主税は武士の義を立て〻父母の言を聽かず。奥に駈け入りて義政公を刺さんとす持豐大に怒つて主税を捕つて拋げ將に手討にせんとす。義政公出で〻之を制する刹那、主税自刄す。公をはじめ父母驚き縋ればいつの間に來りしか細川勝元夫婦駈け入りて足利義政公の御首請取ったりと呼ぶ。持豐驚き仔細を問ふ。勝元曰く、主税を御身替と思へども義理の子なれば手に掛けられず、かくは計ひしなりとて歎く。母と母とは手負に取りつき泣涙禁ずる能はず。義政公感謝の涙を流し給ひ、われ世に出でば、祖父義滿公の金閣寺に倣ひ、銀閣寺を建て〻、主税の冥福を祈らんとのたまふ。左衛門持豐、誓を切り名を宗全と改め、養君を守護すべしと誓ふ。勝元は主税の首を持つて館に歸るといふ節。

細川勝元、山名持豐両者の忠烈、義烈は眞に武士道の精華を發揮せるもの、主税自刄して若君の御身替となる。一死の榮何ものか之に如くべき。

阿波の浦洲　鈴鹿合戰　平治住家の段

阿波の平治(實は桂平治清房)の女房お春(元は田村將軍の息女春姫)貧の窶もいとはず姑の難病を看護し勞

り待くこと篤し。今日も姑は嫁の懇篤なるもてなしを謝しつゝ暫し對話あり。所へ庄屋の彦作といふもの入り來り、滑稽の臺詞にて昨夜阿漕浦殺生禁斷の場所へ網を入れたるものあり。番の者將に捕へんとして遂に捕り逃したれども、そのあとに簑と笠とありて、笠には平の字と治の字とあり。村中に治平といふものなければ、犯したるものは汝にはあらざるか、若し自首し出でば妻子親類には構なしとの詮議なりといひて歸る。後に女房不審ながら夫に仔細を問ふ、平治自白して母の難病も身貧なれば大醫を頼む力はなく、醫者の話に「たいほう魚(俗稱やがら)といふ魚を與ふれば直に本腹あるべし、」と聽きしより、これ幸と禁斷の場所へ網を入れたるに其の魚は上らずして靈々たる名劍を得たり。これ正しく十握の寶劍なるべし。御身は之れを持參して都へ歸り、御父田村將軍に奉り、母の養育頼まむ。吾はこれより自首すべしと言へば、女房泣いて聽かず、一子友石も父と共に行かんと泣く。平治熟と言ひふくめて立ち出でんとす、病母平治を暫しと留め、杖を以て丁々と擲ち殺生禁斷の場所へ網打ちしは孝行に似て孝行にあらずと唐土の例を引いて折檻す。所へ平瓦治郎藏といふ者庄屋と共に入り來りて。昨夜禁斷の場所より得たる寶劍を得んと强請す。暫く立廻りて平治「某元は田村將軍の家臣仔細あつて親を討れ其敵を索むる折柄母の難病、遂に昨夜の仕儀に及びし」との物語に治郎藏驚き平伏し、某は中川宇内とて貴所の親御に仕へし身、仔細(本文に詳し)あつて某も夜な〳〵禁斷の場所へ網を入れ、知らぬことゝてその罪を古主の若殿に讓らんとせし事、かへすがへすも勿體なし」、と詫ぶ。平

治、宇内に老母妻子を同伴して都へ上り哭れよと賴ひ折柄、母自害す。夫婦、宇内もともに驚きすがる、老母長々と死ぬる理を述ぶ。孫友石は老婆が冥途の土産にと奴任立の踊を舞ふ。老婆感極まつて泣き孫を抱きしめて死す。所へ代官、奥村兵庫捕手に向ふ、平治平然として縛に就かんとするを、治郎藏の平内、科人は我なりと名乘る。代官簑笠の平治を證據に繩かけんとすれば治郎藏それこそ我に極つたり。平瓦の平と治郎藏の治と各頭字を記し置きたる我が簑笠なりと遂に身替となつて縛に就くといふ節。

平治の女房お春、時めく田村將軍の御息女ながら、今零落して其の日の糊口にも差支ふる身分にて病母を養ふ孝行は名譽に憧がるゝ當世婦人の良き鑑といふべく。病母が平治を打擲して盜する孝行は眞の孝行にあらずとて折檻せる言の葉、中川宇内が舊恩を忘れず、平治の身替となれる誠忠、老母が自害しての物語は言々皆之れ血、句々皆これ肉。

本朝二十四孝　全篇の大要

この篇は、元の郭居業が撰べる支那古今の孝子二十四人の中、孟宗といへる人の雪中に筍を掘れる故事や、子を埋めんとして黄金の釜を掘出せる郭臣の故事に倣ひて、本朝孝子の傳を假作しだれば本朝二十四孝とば題せるなり。

凡そ戯曲は全篇を通讀せざれば、その意義を了解する事困難なるが、殊に此の段は趣向あまりに巧妙に過ぎて錯綜せるが故に、わきて了解に苦しむ作なり。されば次に一篇の筋書の大要を記すことゝすべし。

抑も、事の起りは井上新左衛門（この人は始めて我國に砲術を傳へし人なり假りて用ゐしなり）といふ曲者、南蠻國傳來の鐵砲獻上を名として時の將軍足利義晴公に拜謁を請ひ、其の座に將軍を斃して何れへか逐電せり。時恰も群雄割據の世にして、最も勢力ありしを武田上杉の二氏となす。されば將軍弑逆の嫌疑ははしなくもこの二氏にかゝれり。二氏其の潔白を表はさむがため將軍の後室手弱女御前に誓ひて曰く、三年の内に下手人を搜索して參らせん、若し能はずんば各一子を首にして奉らむと。然るに三年を經るの後、尚曲者を捕ふる事能はざりしかば、武田家に於ては勝頼を、上杉家に於ては景勝を首にせざるを得ざる場合となれり。話頭一轉して武田信玄の家臣に板垣兵部といへるものあり。其子は主君の子勝頼と同年月日に生れ且つ容貌も酷似せるより、奸策を以て陰かに取替子とし誠の勝頼をば信濃の國諏訪の民家へ送りて武田家を覆さんと圖りしが事露はれて誅せられたり。されば兵部の子なる勝頼は眞の勝頼の身替となりて切腹するに至れり。こゝに亦齋藤道三といへる姦雄あり、足利氏のために美濃を奪はれしを遺恨とし先づ武田、上杉の両氏を滅し、次に將軍家を倒して天下を奪はむとの大望を抱き、其の娘濡衣といへるを武田氏の奥女中として住込ましめしが濡衣遂に兵部の子なる勝頼と通ずるに至れり。かくて

齋藤通三は謀りに謀り工みに工みしが遂に篇中の主人公たる山本勘助に觀破せらるゝことゝなるといふ節。

本朝二十四孝

桔梗が原

信濃國、桔梗が原に於て上杉武田の奴共秣を苅りつゝ領分爭を始むる折柄、武田家の執權高瀨彈正の妻唐織、上杉家の執權越名彈正の妻入江來り會し、爭の始末を聽き、茲に両女房の爭論となり、互に其の相手の夫を罵り合ひ、唐織は遂に入江に言ひ負され無念の涙を押へて分る。爰にこの近方に住む慈悲藏といふものあり（後の直江山城守兼續）能く親に仕ふ。常に孝養至らざらんを悲み、一子をばこの原に捨てんとさまよひ來り愛別を悲しむこと多時、遂に両國の境に棄つ。かゝる所に高瀨彈正神詣の爲め來りて件の捨子を拾ふ。仔細に檢すれば守札に山本勘助と記されたり。當時山本勘助といふは無雙の軍者なれば甲斐、越後両國兼てより囑望する人なり。彈正即ち連れ歸らむとす、折柄越名彈正顯はれて領分の境に棄てゐりし稚子、貴殿一人の自由にもなるまじとて遮る。茲に又両者の爭となりしが両者の女房の才覺にて乳房の奪取と一決す、稚子は両者の乳房につかざれども、唐織の懷に抱かれて機嫌よげに眠る、即ち武田家のものとなり高瀨彈正連れて歸るといふ節。

本朝二十四孝

景勝下駄の段

慈悲藏夫婦、我が子を棄て兄横藏の子治郎吉を養うて我が子の如くに育み母の孝養を怠らず。慈悲藏母の馳走もがなと吹雪の日も厭はず漁獵に出づ。女房は治郎吉を嫌しつゝ子守して留守せり。村の誰彼、來りて慈悲藏の孝心を賞し、兄横藏を罵ること頻りなり。慈悲藏漁獵より歸り、母人の機嫌を尋ぬ。（折柄上杉謙信の長子景勝高足駄を穿つて此の家へ來る。これ軍師を求めんとするなり）慈悲藏かく母に孝養を盡すと雖も母喜ばず、邪慳極まり無し。殺生の孝行は眞の孝行にあらず、筍を採り來れ」と命ず。慈悲藏寒中に筍を得んこと六ヶ敷業なれば躊躇す。母大に怒り我が夫山本勘助亡じてより二子の中、何れかに勘助の名と軍法奥義とを授けんと心を碎けども、汝の如き不孝の子には與へられずと下駄を以て打擲せんとす。其の刹那景勝踊り出で下駄をとつて老婆の前に差置く、老女漢の三傑張良が故事も忍ばれて、奥ゆかしさに景勝を引見す。景勝老女の子息を得て軍師たらしめんとて兄横藏を懇請す。母心中不審ながら諾して曰く、兄は目下他行なれども此母代りて約束せんと、乃ち景勝老婆に誓約の一品を與へて別るといふ節。

此の段慈悲藏夫婦が老母に孝養を盡す條、親親たらずとも子子たるの務を全うせるものにして眞に龜鑑とすべし。又景勝が軍師を求めんと老婆に下駄を捧げしは張子房の故事を學びしにて其の心ゆかし。

一谷嫩軍記

熊谷陣屋の段

熊谷次郎直實の妻相模、其子小次郎が初陣の樣子如何と鎌倉より百里餘りを遠しとせず、一谷の陣屋に尋ね來り夫の歸りを待つ。熊谷歸陣して妻の未練を叱す。熊谷戰陣の有樣を語り、無官太夫敦盛の首取つたりといふに、後にありし御臺所藤の局、我子の敵と熊谷に切つてかゝるを引寄せて、顏見て惚り飛退き上座に敬ひ奉り、敦盛卿を討つたる次第物語らんとて、「敦盛卿に一旦は落ちさせ給へと勸めしかど健氣にも武士の面目早首取れよとのたまふ。わはれ我が子の小次郎と年輩も同じく、子を持つ親の心を察して、太刀も拔き兼ぬる折柄、後の山より平山が熊谷に二心ありと呼はる聲に、詮方つきて斯の通りと」述ぶ。御臺所悲歎の涙に暮れ給ひ、熊谷に一目我が子の首を見むと請へども實檢の濟まざる中はとて許さず。一間の內より聲あり、敦盛の首是にて實檢せんと襖開かすれば義經公なり。熊谷平伏して嘗て御諚の如く正しく敦盛卿の御首討取つたり、御實檢下さるべしと差出す。實は我子小次郎の首なり。義經公欣然として花を惜む予が心を察し、能くも討つたりと宣ふ。後に女房の口說御臺が同情の愁歎あり、折柄螺貝の音喧しく響けば義經公勇み立ち、熊谷に出陣の用意せよと宣ふ。是に忍び者あり、石屋の親爺石鑿を以て討ち留め行き過ぎんとす。義經親爺の實名を呼んで「彌平兵衞宗淸待て」と仰せ、昔の恩義を謝す。次に宗淸の述懷あり、義經彌陀六に鎧櫃を與ふ。（內は敦盛卿

なり熊谷が我子を身替りとして助けし所再び相模の愁歎あり。義經熊谷にはや出陣と逼る、熊谷恐れながらと兜を取れば切拂うたる有髪の僧、義經感じて熊谷に暇を賜ふ。彌陀六は藤の局の御伴申し三人三方に別るゝといふ節。

因云、此の段世間通常語らるゝ如く「敵と目指すは安德天皇」を「平家の一門」と改め又「私がお館」の下でをよりに替へ直ちに「懷胎ながら東へ下り」に續けて語るものなり。これも適切なる改作なり。熊谷次郎直實が舊恩を思ひ、我が子を敦盛卿の身替りとせし苦忠は言はずもがな。女房に「女の身で陣中へ來る事不屆至極」と叱る所、武士の面目見ゐて面白く、義經公の寛仁なる態度武勇にして仁義あるは我が武士道の特色といふべく、彌平兵衛宗淸が懷舊の涙には忠義の心血を混じて紅よりも赤し。

彦山權現誓助太刀　六助住家の段

八重垣流の達人毛谷村六助といふ者、山賤となつて世を渡る。ある日亡母の四十九日、墓參の歸るさ盜賊二三人、一人の老人をなぶり殺にするに逢ふ。六助これを見、盜賊等を蹴殺し老人の連れなる小兒を抱いて歸り。何處の誰れが子なるやを知らず、不憫がりつゝ育つ。ある日、一人の虛無僧門口に來り、見覺ある衣服のかゝれるを見て不審かりつゝ手に取らんとす。後より二三人虛無僧目がけて打

つてかゝるを、虚無僧尺八を以て難なく打ち倒す。六助内よりこの樣を見て詰る。虚無僧「家來の敵覺悟せよ」といひつゝ内に入り、六助に切つてかゝる。六助拔けつ潛りつゝあしらふ内に、小兒走り出でて「伯母樣」と呼ぶ。六助この小兒を得たる始終を述ぶ。虚無僧も亦已が素性を明かし、茲に虚無僧は「おろの」といひて藝州の劍客吉岡一味齊の息女、六助とは許嫁の夫婦たること明かになれり。（一味齊は六助の爲には師なり）是に於て、おその父一味齊が京極内匠の爲に討れたること、弟の悔死せしこと、妹も亦劍難に倒れたること等を物語り、その仇を討たんと誓ふ。障子の中より吉岡一味齊の後室稚子の手を引きて顯はれ出で、三々九度の杯を取り交はさしむ、所へ斧右衛門といふ爺、老婆の死骸を戸板に乘せ來り敵を取つて給はれと歎願す。

（これ微塵彈正といふゝの斧右衛門の老母を借り受け、已の母となし孝養の爲六助との御前試合に勝を讓らしめ、事顯はれんかと遂に殺し捨てたるなりき。六助無念の齒がみをなす。母微塵の名を聞き、ろは京極内匠の事にして夫の敵なりといふ。六助憤慨禁ずる能はず、おそのと共に仇討御免の訴訟をなし、戴天の仇を報いんとするといふ節。

おその、女性の身を以て父の仇、妹の仇を報せんと萬苦を排して敵を索むる孝心義心、今日の世採つて直に則とすることはもとより不可なれども、其志を轉じて父母に孝を盡し、兄弟に友を盡さばこれ我國民として聖旨に對へ奉る所以の道なり。

六助父母に孝なるが故に、他人もさあらんと微塵彈正の詐謀を知らず、御前試合に勝を讓りたるは

何等の美談大和魂の趣く處常に斯の如し。

日本賢女鑑

片岡忠義の段

片桐造酒之頭春元、坂本城の奥御殿に忍び入らんとして大花壇に入る。大場の手下共槍を以て突いてかるゝを事ともせず薙ぎ倒し、奥に入らんとする彼方より、妻染の井、娘と共に御殿を下り來て造酒之頭に逢ふ。造酒之頭「主君時政の御諚により、宇治の方を初め和田、三浦の面々を鏖にせんと打ち込んだる大砲の空しくなりしは殘念」やといふに、女房娘あまりの事に驚き倒れ、且つ泣き且つ諫む。造酒之頭せゝら笑つて「一旦鎌倉へ返り忠せしからは心を變ずべからず」といふや、娘住の江用意の懐劍を以て自害し哀嗟父を諫む。造酒之頭女房娘を蹴退けて奥深く入らんとす。此方の一間に聲あつて坂本の軍師和田兵衞秀盛、宇治の方を守護して現はれ出で造酒之頭に向ひ、覺悟の切腹推察に餘りありと、大地を見ぬく詞に造酒之頭張り詰めし心もゆるみ轡と座す。妻子取り縋りて泣く。造酒之頭誠心を吐露し、這ひ寄つて手負の娘を抱き起し、健氣な最期を譽む。宇治の方片岡父子の苦忠を賞し、冥途の土産にとて自分の放埒惰弱も心ありての事なりと眞情を披瀝す。片岡喜び我が誠忠も斯くの通りと敵より奪ひ取りし源家の白旗を秀盛に渡す。秀盛喜び勇む。造酒之頭一旦なりとも返り忠せし二股武士の成敗はこの通りと女房の手を取り己が首をかき切つて果つといふ節。

此の段、片岡造酒之頭が身敵國にありて心常に君側を離れざりし誠忠は、かの漢の蘇武が匈奴に虜はれて十九年遂に其の節を變せざりしと撰ぶ所なかるべく、娘住の江が健氣にも死を以て父を諫むる秋霜烈日の如き感念は獨り我が日本魂に於て睹るべきのみ。

名筆傾城鑑　吃の段

爰に土佐將監光信の末弟に浮世又平重起といふ繪師あり。生れつき吃音にて言語明かならず。加之極貧にて其の日の糊口にも差支ふる程なりしが、生來の師匠思にて今は日蔭の師匠將監を夜毎夜毎に訪ふ事を怠らず。今夜も師匠を訪ぬ。將監の奥方挨拶し且つ門弟修理之助に土佐の姓を許し、土佐光澄と名乘らしめたりと披露す。又藏茲ゞと思ひ、女房を先へ押出し自分も平伏して願ありげに見えたり。女房お德心得て懇々名字拜領を乞ふ。將監不便には思ひしかど、理をせめ事をわけて許さず。折柄注進あつて館の騒動あり、姫君は敵のために奪はれたりと報ず。將監夫婦驚き誰かよき辯舌の人はなきか、將軍家の御意と欺き姫君を取り返さん人もがなと騒ぎ修理之助其の任に命ぜらる。又平廻らぬ口を極めて自其の役目を負はんと請へども口吃るを以て許されず。又平無念のはがみして庭の手水鉢を石碑と定め我が名を書き付くれば、一念凝つて墨痕背後に透る。將監大に感じ肇めて土佐の姓を許し土佐又平光起と名乘らせ、其の勢に乘じて姫君を奪び返せと命ず。又平大に喜び勇む。將監手水

鉢を切り割り誓願寺の佛の例を引き「心の臓を斷切つたれば吃ることあるまじ」といふに又平音吐朗朗一語も吃ることなく謝禮を述べ勇みて出で行くといふ節。

此の段荒唐無稽に似たれども、かゝる神話的説話は古今東西多々あることなれば強ち咎むべきにあらず。精神一たび到らば何事も成るてふ好感化を與ふべし。又平夫婦が身貧苦に逼りつゝも師恩の高きを忘れず、夜毎に見舞ふ心事は殊勝なり。又女房お徳がよく吃の夫に侍して扶養怠らず、夫の出世を願うて心を焦せる衷情亦可憐といふべし。

奥州安達原　宗任物語の段

鳥の海文治安方主君安部貞任より君々千代童を預り、我が子として養ふ中、若君は病の身となる。安方夫婦は衣服諸道具迄悉く人參の代に換へて藥代とし、今は殆んど一物も殘さず貧苦に逼れり。女房決意し身を賣つて藥代を得んとす。夫許さずして我によき思案ありとて一札を認め、代官所へ持參せしむ。これ鶴殺しの訴狀なり。後に安方千代童を慰めそれとなく暇乞をなし、佛檀を開き、故君賴時分を呼んで禮拜す。隣の部屋にも賴時公の法名を呼ぶ者あり。安方不審かり障子開けば豈圖らんやこれまで食客として我儘を盡せし厄介者の南兵衛素袍立馬帽子にて合掌せり。安方仔細を問ふ。南兵衛徐ろに名乘つて我こそは安部三郎宗任なりと、安方飛退りて平伏す。これより宗任の物語あり。所

へ女房は褒美の金に勇んで我が家に歸る。後より捕手の者大音上げて安方を縛せんとす。女房大に驚く。これ安方が若君の人參代に窮して鶴を殺し、女房に訴人せしめたるなれども女房には南兵を訴ふる如く欺き、女房は目に一丁字なく訴狀を讀む能はざりしを以つて、かく齟齬せるなり。女房夫に取り縋りて恨み且つ泣く。千代童屏風に倚つて悲み泣き遂に絶命す。安方悲嘆に暮る。役人共安方を引立てんとす。折柄南兵衛顯はれ出で〻鶴殺しの科人は我なりと義家公が放ちし鶴の脚の黄金の札を出す。役人安方の縛を脱きて南兵衛に打かく。互に他を庇ひて罪を爭ふ。安方若君を殺し〻責を負うて自殺せんとす。南兵衛これを止め以心傳心の間に再擧を約して、宗任の南兵衛引立てられて行くといふ節。

此の段善知鳥安方夫婦が主君の若君を守護するため、家財衣服を悉く擲ち剩へ妻は身を賣らんとし、夫は命を棄てんとせる慘澹たる苦衷寔に仰慕すべし。宗任が其の義に感じて鶴殺の科を身に引き受け縛につく壯烈亦欽仰すべし。尙此の段には學問の大切なるを訓へ、女房の詞を假りて「さても世の中に物書かぬ身の上程辛い悲しいもの有らうか」、「私を世の人の物書かぬ身の見せしめになれ」と言はしめたるは聽く者をして寸鐵斷腸の想あらしむ。

箱根霊現

躄仇討

餞別の段

飯沼勝五郎、妻初花と共に兄の敵捜索のため、奥州と下野の國境に漂泊し、夫は躄の身となり、妻は介抱しつゝ乞食に其の日を過す不運の身とはなれり。庄屋德右衛門といふもの〻厚情にて小屋を作り與へられ纔かに雨露を凌ぐ。ある日溝口源左衛門といふ庄屋代官初花を手込にせんとして、却て初花に投付られ大に怒つて手討にせんとする所を德右衛門に助けられたり。（以上前提）勝五郎小屋の内より這ひ出でて、德右衛門に謝す。德右衛門下僕に曳かせたる一臺の車を夫婦に與へ、早く此所を立ちて何處へなりと行かれよと勸む。これ北條氏政より夫婦二人の人相書を廻し嚴しき吟味あるを知りたればなり。夫婦は篤く德右衛門に謝し、己が素性を打明け、明曉を待ち出立せんとす。其の夜溝口源左衛門多くの百姓を引き連れ夫婦を捕へんと來る。初花縱横に投付け投退くる折柄何者とも知れず駈け來りて百姓共を礫の如く投げ散らす樣天狗の業に異ならず。源左衛門此の勢に辟易して逃げ去る。後に熟々見れば下僕筆助なり。主從共に奇緣を喜ぶ。暫らくして夜もやうやうに明けんとする頃、最前の德右衛門家内引き連れ來りて夫婦に離別を惜み、主人は金子女房は小袖、手拭、紅、白粉といふ樣に家族銘々適はしき餞別を贈り、名殘をしくも別るゝといふ節、最後に隱れ窺ひたる溝口、勝五郎に斬りつけんとするを筆助の爲に難なく溜池に投げ込まる。

この段は庄屋德右衛門の深切が骨子なり。德右衛門の質朴なる深切、この人にしてこの家風あり、家族擧げて仁慈に富めるは聽くさへ心地よき事どもなり。奴筆助の忠義なる主人を搜すこと數年一日も主恩を忘るゝことなく、焦心苦慮せるは憐れにも亦崇高き限なり。

國性爺合戰

全段の大要

明國の大臣李蹈天といふ姦雄、私に韃靼國王と結びて大明國を覆さんとす。忠臣鄭芝龍(老一官)諫、容れられずして却て放逐せられ、亡命して我が日本に寄寓す。肥前國平戸の浦にて日本人の妻を娶り、和藤内といふを儲け、既に成人に及べり。時に大明國は遂に韃靼王の滅す所となりしと聞き、父母と共に彼の國に渡り、異母の姉錦祥女が婿吳三桂甘輝に賴り、共に俱に韃靼王及び李蹈天を滅し、皇后遺腹の皇子を立て遂に大明國を再興せしむるに終る。盡し作者の意は外事に托して忠勇義烈なる日本魂を外つ國にまで輝かし、勇武絶倫の和藤内を假作し、我が國體を說示せるものと見るべし。

國性爺合戰　樓門の段

和藤内父母と共に彼土に渡り、艱難辛苦の後赤壁山の麓にて親子三人廻り會ひ、共々に呉將軍甘輝の居城獅子城に到着す。見れば樓門堅く鎖せり。和藤内血氣にはやり樓門を破り入らんとす。母之れを制す。和藤内門外に高く呼はる。當番の兵士鐵砲を放さんとす。錦祥女之を制して高欄に上りて相會ふ。一官始終を物語る。錦祥女高欄の上より柄付の鏡をとり出し、月の光に照し見れば疑もなき父なるより飛び下りて會ひたきは山々なれども叶はず。高欄の上と下、千々に心を碎く。一官頼みたき仔細あり入城を許せと乞ふ。錦祥女義として許す能はず。和藤内の母進みて曰く年老いし女一人、甘輝殿の御尤もあるまじ、繩付にして通されよと請ふ。錦祥女これを許し父に約して曰く、願の件夫の聽許あらば白粉をといて流すべし、紅の流を見ば叶はずと知らるべし、其の時は母を請取りに門外に來られよとて互に別るといふ節。

國性爺合戰　獅子城の段

前段の續にして、和藤内の母健氣にも老体に繩うたれ、奥殿に請せられ孝心深き娘の饗應を受けつゝある所へ聟の甘輝歸城する所となる。馬車音表に轟きて甘輝將軍歸城す。錦祥女夫の機嫌を伺ひ今日の始終を物語る。甘輝喜び直に會ふ。老母は甘輝が深切なる言葉に頼みたき願とは外ならず、夫一官一子和藤内大明國を覆せし韃靼王を滅し、大明國を再興して忠義を立てんために此上に渡れり。御許

和藤内が片腕の力となりて給はれと懇願す。甘輝大に驚き存ずる旨ありとて返事を延べんとす。母聞かずして直ちに返事あれといへば、甘輝いかにも和藤内が味方せんといふより早く錦祥女を刺さんとす。老母狼狽してこれを止め、理を以て責む、甘輝口を開いて曰く、吾韃靼王より和藤内追討の大命を受け十萬騎の大軍を得たり。然るに和藤内に一矢を報いずして味方せば妻の愛に溺れたりと人いはん。その耻辱を受けざらんため妻を殺さんとせるなりとて妻に向ひ「命をくれよ女房」といふに錦祥女「忠孝のため捨つる命惜からず」とて自害せんとす。母曰説立て〻止む。甘輝席を打つて是非もなし、然らば敵對せんといふ。錦祥女一間に駈け入り紅を流す。和藤内下流に之を見、怒つて自ら獅子城に押し寄せ、單身甘輝と雌雄を決せんとす。錦祥女双方を止め紅の水上見給へとて衣裳の胸を開けば天晴や自害せり。母愁歎す。甘輝國性爺の前に平伏し、妻の縁を絶てる上は進んで御味方申さんとて國性爺に延平王の尊稱を奉る。母喜び娘の九寸五分をとつて自害し後顧の憂を斷つ。両雄互に辱を思ひ涙を隱して泣き、母の敵妻の仇と勇んで出陣の門出をなすといふ節。

以上二段を通じて徹頭徹尾教訓を以て滿され、社會風教上好個の標題たるのみならず、文藝の上より見ても多く匹儔を見ざる作なり。されば今一々作中の人物の忠孝慈貞を言はず本文によりて味ふべきなり。

刈萱桑門筑紫轢　山の段

筑紫松浦黨加藤左衛門繁氏、大内の助の謀叛により、高野山に遁れて佛門に入り名を刈萱道心と改む。故郷に殘りし妻子悲歎やる方なく、遙々父を尋ねて靈山の難所を辿る。母は病危篤に陷り山の麓にあり。石動丸父戀しさに瞼衄を攀ぢ暫し岩根の松蔭に憩ふ。折柄出家一人來かゝりければ石動丸駈けよりて父の在所を問ふ。神ならぬ身の知るによしなく、これなん父の君なりける。出家は尋ぬる人の俗名を聞きて扨は我が子かと取り縋らんとせしが、今佛門に入りし身の、佛の誓もあれば、餘所に言ひなし早く歸つて母に孝行せよと敎ふ。石動丸「母は道の疲に病起り今山麓にあり、命旦夕に迫る」と歎く。互に悲しき對話あつて刈萱靈藥を石動丸に與へて山を下らしむ。刈萱道心もさすが恩愛の縛に引かれ、見え隠れに後を慕うて行く。山の下よりは玉屋の與次御臺所を負ひ娘門田を伴ひて女人堂まで來り、門田に御臺を守らせ自分は女房お埒が追手を引受戰へるを救はんと取つて返す。後に門田御臺樣を介抱す。御臺病愈々重く夫を慕ひ子を慕ひ焦れに焦れて遂に絶命す。門田子心に成さんすべを知らず迷ひ泣く。石動丸彼方にこの體を見て駈り來り、前後不覺に泣き叫ぶ。遠目にこの哀を見たる刈萱道心、走り寄りしが、佛の誓を破るに由なく石童を慰め妻に回向す。與次夫婦も駈け戻りて驚き歎く。與次の妻、刈萱を知れり。「お久しや繁氏樣」といふに石動丸茲に初めて父なるを知り取縋らんと

すれば、刈萱打拂ひ逃げんとす。折柄家臣監物太郎大内之助を縛して駈來り、勅命を受けて一戰に打勝ち生捕りて參りたりと報ず。與次跳つて首を討たんとす。かゝる所に新洞左衛門飛び來りて大内太郎の命乞をなす。刈萱奏聞の上命を助けやるべし、これを石動を筑紫へ送る轢にせんといふに終る。石動丸二歳にして父に別れ、顏さへえ知らぬに海山千里を遠しとせず、嶮阪峻路を辿り、母の病を勞はりつゝ父を尋ぬる可憐の情、誰か一掬の涙なからん。加藤左衛門繁氏が身を縮流に投じ、佛の誓を立てし上は親子愛着の絆を解脱し、俗名を名乘らざりしは道心者として當にかくあるべし。玉屋の與次親子三人共に忠僕として推奬するに足る、家臣監物太郎も亦正義の士なり。

楠　昔　晰　三段目

ある日美くしく扮裝せる女房一人の女子みどりを連れて德太夫の宅を訪ぬ、曰く妾は天王寺の合戰に楠を退ひ散らし武名をあげたる宇都宮公綱の妻なりと物語り。夫の勘當御免を請ふ。德太夫は公綱の親なり。然るに又德太夫の妻の娘は楠正成に嫁す。卽ち老人夫婦の子は各々敵同士なり。老人夫婦餘所事に話し合ひて互に他を庇ふこと切、夫婦談合の上公綱の女みどりと正成の子千太郎とを許嫁とせば、圓滿に治まるべしとて目出度祝言せんとす。みどりの母照葉走り出で土器とつて打ち破る。千太郎の母おとはも子を引退け茲に女房同志の爭となる、祖父祖母これを制して奥に入る。後に二人の

女房は銘々夫の自慢を口論し、おとは〻照葉のために氣を制せられ無念の齒がみをなす折柄、庭に燃え立つ火焔と共に四方の山に火籟あがり楠勢優勢となる。照葉驚き立つ。おとは〻、照葉の腰をとつて引返す。一間の中に物音あり、両人驚き障子を開けば祖父と祖母とはさしちがひて血に染まれり。祖父一場の物語をなし吾が子公綱でときが楠に敵對せんは不覺の事、正成は孝行なれば宇都宮向ふと聞かば必らず軍を返さん。これ一天萬乘の君に不忠なり。されば吾々夫婦所詮生きて居られずと述懷す。照葉は最期の際に夫の勘當許されよといへば、祖父石臼を取り寄せさせ血を以て了雲信士妙三信女と二人の戒名を記し公綱若し天皇方へ味方せば其の時こそ勘當許す、其の時此の戒名に墨を入れよ、それまでは夫婦二人修羅の巷に迷うてありと夫に傳へよといひつ〻絶命す。やゝあつて宇都宮公綱と楠正成両人顯はれ、公綱正成に弓を引けば藁人形と化す。向ふに眞の楠控へたり。公綱槍を以て突く。楠は親の忌中なれば避けんとすれど公綱無二無三に突いてかゝる、不思議や殺せし祖父起ち上りて槍を折る。両人不思議の思をなし「魂魄この家を去らずと見えたり。勝負は後日戰場にて決せん」とて引分るといふ節。

老人夫婦が各々義理の子を庇ふ心事の清潔なること、老父が嫁の照葉に向ひろの哀の願を拒けて天皇方の味方となるまで、魂魄宇宙に止つて勘當を許さずと怒る件、又正成が苦衷を察し、老夫婦が刺ちがひて切腹せる忠烈の最期、此の段凡て忠孝を縱に仁義を横に織りなせる寸金の錦なり。

戀女房染分手綱

沓掛村の段

馬士八藏、母と共に貧苦の中に主人物頭伊達與作の一子與之助（五才）を養育す。八藏母の病に稼業も出來ず看病す。されば貧苦はいや增して、今日も懸取等支拂を促し來れども皆八藏の孝心に感涙を流して歸る。八藏母の勸にてこの日稼業に出かけたり。後に乳母は遊に餘念なき與之助を引寄せて、未だ頑是なき稚子に氏素性を說き、必ず立身出世して伊達與作が後繼となれかしと言ひ聞かし、誕生祝にと僅かに數個の餅を與ふ。乳母懷舊の涙止めあへず。折柄息子八藏一人の座頭を乘せて我が家に歸り來り座頭を一泊せしむ。途中座頭につきし强盜を追ひ拂つて難を救ひし物語などして寢に就く。夜深更に及びて八藏太刀を研ぐ。音に母目覺む。座頭慶政も亦我身の大事と帶引きしめて用意す。母突然障子を開けて八藏を詰る。八藏冤を訴ふと雖も母聽かずして折檻す。八藏眞意を打開く、そは主人伊達與作の金子三百兩を奪ひし八平次、今夜坂の下にありと聞く。これを殺して主人に忠を立てん我が志。若し母の聞し召さば御病體に障りあらんかと故らに匿せり云々となり。母諫止して曰く、若し一命を落さば此の母と與之助とを奈何せんと歎く。八藏母に從ふ。折柄慶政勝手に出でて、一泊を謝禮し暇乞して出で立つ。入り替つて二人の强盜押し入り、八藏が座頭の金を奪ひしかと疑ひ强奪せんとす。八藏火鉢をとつて拋げ付くれば、灰の中より三百兩。賊は八藏の手並に辟易して逃げさる。八

藏、母と相談の上三百両を慶政に返さんとて走り出づといふ節。

馬士八藏の孝心よく債鬼を泣かしむ。其の八平次を討つて主人の仇を報せんとせるは忠といふべく座頭慶政の難を救ひしは俠といふべし。而して灰中の三百両を返さんとせるは正直、又乳母が養君に對しての慈悲、何れもかくありたきものなり。

敵討檻襤錦　大安寺の段

春藤次郎左衛門、弟新七と共に親の敵次藤彦坂を討たんとて國々を廻り二ヶ年の星霜を經、郡山の近在大安寺の隄に非人となりて住む。兄新左衛門は風氣のため病の身となり、弟は日日敵の搜索に出かけ今や歸りて兄と共に述懷すること多時、弟は兄の病を苦にし往復五里を隔る郡山まで藥を求めむとす、兄止むれども聽かずして行く。後に次郎左衛門は弟の深切、國元の母や妻の心勞を思ひやり轉た感慨に逼りしが氣を取り直して寢に就く。間もなく、宇田右衛門、高市武右衛門、同一子庄之助等家來引連れ、非人次郎左衛門を引き出し刀試しに切らんとす。非人次郎左衛門切に救命を乞ふ。高市の一子庄之助同情して命乞をなす。宇右衛門聽かずして家來に命じて引出さんとす、次郎左衛門これを縱横に抛げ散らす。宇田右衛門怒つて己眞つ二つにと懸らんとす、武右衛門暫しと制し次郎左衛門に向ひ、汝は唯の非人にはあるまじ、何か大望ある身ならずや、若や敵討にはあらざるかといふに、次

郎左衛門己の素性を語りて大望遂ぐるまでの命乞をなす。宇田右衛門疑ふ。次郎右衛門所持の刀を見するに至つて初めて仔細を知り、慇懃に挨拶し大望成就を祈りて別るといふ節。

次郎左衛門兄弟が親の敵を討たんと非人にまで身を落し、櫛風沐雨の萬難を厭はず焦心苦慮せる孝心、殊に弟新七が兄の病氣を勞はりつゝ、寒夜に五里を遠しとせず藥を求むる可憐の情、武右衛門の子庄之助が非人の命乞をなす惻憐の心、共に社會風教の興奮刺たらざるはなし。

神靈矢口渡　身替の段

新田佐兵衛佐義興、足利尊氏のために破られ、矢口の渡（武藏國荏原郡矢口村今新田明神を祀る）に於て江田、竹澤のために横死を遂ぐるとき、家臣兵庫助信忠、南瀨六郎に囑して若君德壽丸を守護せしむ。両人計略の上兵庫助は詐りて足利尊氏に屬し一子友千代を南瀨六郎に渡し、若君は自分の子として養ひ奉れり。この段は南瀨六郎、友千代を笈に忍ばしめ六部に身を窶せしが遂に敵の知る所となり追手をさしむけらる。六郎追手をなやまし兵庫助の館に逃げ入る。足利尊氏の家臣竹澤監物上使として來り、六郎及び若君を出せとの上意を傳ふ。兵庫助畏つて隣室に一矢を放ち、南瀨六郎を射る。南瀨六郎血煙と共に踊り出で兵庫助に切つてかゝる。兵庫助一太刀に切落し笈より若君（實は我子）を引き出し首を討つて檢使の前に出す、竹澤監物莞爾として首請取りて歸る。この騷を聽き義興公の御臺所と

侍女みなと（元兵庫助の妻）途中より取つて返し死骸に取りつきて泣き、我子の敵と御臺所、みなと〻共に兵庫助に突いてかゝる。兵庫助一間に逃げ入り、やがて眞の德壽君を傳き顯はれ出づ、二人は夢に夢見る心地なり。兵庫助と手負の六郎二人、計畫の始終を物語る。兵庫助の妻みなと始めて夫の誠忠を知り我が子友千代の遺骸に縋つて泣く。両雄懷舊の涙に咽び六郎は敵を謀るために自殺するといふ節。

兵庫助が我が子を身替りとし一刀の元に切放ち、しかも計略とはいへ親友南瀨六郎に傷を負はしめたる秋霜烈日の如き壯烈、南瀨六郎がいつか身替りとなつて死すべき友千代を負ひ、身を忍びつゝ貰乳に心を焦す衷情、共に忠烈の極といふべし。憾むらくは此の両雄亡君義興の仇を報ずる能はざりしこと、兵庫助の妻みなとが夫を捨てゝ御臺に侍けるは大義親を滅したるものといふべし。

那須與市西海硯

化粧屋敷の段（化粧は化生に通ず）

下野那須野の原に化生屋敷とて變化出づてふ屋敷あり。那須與一旦方弓矢の德によつて、鎌倉殿より此の屋敷を貰ひ受く。鬼神も其の德に感じてや爾後何事もなかりき。旦方に二人の子あり。兄を小太郎（十三才）といひ弟を駒若（十一才）といふ。兄は温順にして弟は腕白なり。或る日兄弟の乳母各々和子の自慢に爭論を始む。旦方の奥方駒の井御前出でて之を制す、折柄表の方に聲ありて旦方の兄五十嵐小文治入り來り、弟旦方が西國加勢の願聽許せられたりと報ず。旦方大に喜び兄を招じて門出の祝宴あ

り。旨方兄に相談して悴兄弟の中一人を戰陣へ連れ行かんとすといふ。此談合洩れ聞えて兄小太郎從事を懇願す、弟も亦自らをと强請す。父旨方扇を庭の東西に立て射中てたる方を從へんといふ。兄弟東西に別れて射る。弟駒若勝ちて從軍と定まる。兄小太郎切齒して歎く。乳母且つ諫め且つ慰む。小太郎心に切腹と覺悟して書置を認む。折柄颯と吹き來る强風と共に家鳴り震動す、正しく妖怪のわざと覺えたり。小太郎凛乎として立てば、顯はれたるは年ふる野干なり、小太郎小太刀を拔いて突留め大音上に呼はる、人々駕き來りて熟々見れば小太郎の乳母なり、乳母喜んで小太郎の手柄を賞し、眞に此の手並あれば戰場に出づるも不覺は取るまじ、是非に西國御供をと歎願しければ旨方も述懷し、吾弟に依姑ありて兄小太郎に與へし矢はろれ矢なりしと懺悔して乳母に謝し、西國の從軍を許す。小太郎勇んで馬に乘り出づれば早や弟は先立ちたり。兄小太郎宇治河先陣の眞似をして弟に油斷せしめて先駈く。乳母これを見て喜んで死すといふ。

兄小太郎の乳母が一身を犧牲とし、故らに小太郎の手にかゝりて其の手並を試し出陣を請へるは忠烈の行爲。又兄弟二人が初陣の門出に勇ましき武者振は殊勝。今の世徵兵を忌避する軟骨漢は當に愧死すべし。

因云、此の段與一旨方が後日八島合戰に扇の的を射たりし前表を出し、又宇治川先陣を摸擬して是に配したるは作者の巧緻といふべし。

古戰場鐘懸松　鐘の段

源藏は源氏方義經に仕ふ。故ありに勘氣を受け、剩へ靜御前を奪ひ取られ悄然として我が家に歸り、靜御前を義經公に手渡し勘氣も赦されたりと詐はる。然も身は刀傷に基因して病を受け命數計り難し女房は神に祈願して平癒を祈れり。源藏熟々武運拙きを憾み自殺を覺悟す。女房は源藏の苦衷を知らず、只管祈願を怠らず、源藏女房を離別し戸外に押し出し割腹す。女房駈け入り愁歎之れを久うす。折柄一間より兄後藤兵衛顯はれ弟の立派なる最期を賞し、汝に代りて義經方に味方せんといふ。源藏遮りて源平両君に仕ふるは二心なりと留む。後藤兵衛曰く今や賴朝、義經御仲不和なり。平家の仇は賴朝一人なれば主君平重衡公に說きて義經に心を合はさしめ、一身以て源平二君に仕へんとすと天文を說き故事を談じて物語る。源藏莞爾として死す。源藏の妻歎を止め、夫の遺意に從ひ、その首を後藤の首と欺き敵へ渡さんと立つ。後藤は義經の隱家を尋ねて事を圖らんと出で立つといふ節。

源藏死後の名を瓢ゝ疊の上の犬死せんよりはと潔く割腹し、然も其の身、兄の身替りとなりし義忠兄後藤兵衛が主君重衡のために圖れる謀略、源藏の妻が夫の病氣平癒を祈誓して五十日百日の精進を厭はざらんとせる衷情、何れも感ずるに足る事どもなり。

北條時賴記

最明寺の段

執權北條時賴、沙門の身となり諸國を行脚し、修業に兼て民情を探る。信濃より鎌倉に上らんとして上野の國佐野にて行き暮れ、且つ大雪ふりて路を埋めければ、さる茅屋に宿りを求む。みれば小女なり（名を玉章といふ）小女主人の不在なればと斷る。旅僧止むなく門外に待つ。暫くして女主とおぼしく寡れはてたる女房歸り來る。乃ち宿を求む。女房見苦しき賤が伏屋、御宿叶ふまじといひければ、旅僧よしなき人を待ちつるよとて去る。後に小女姉に勸めて止めんことを請ふ。女房旅僧を追うて連れ歸り一宿せしめ粟の飯を參らす。尙松、竹、梅三鉢の植木を折り燒火となして饗應す。旅僧は女房姉妹の親切に感じ同情して、如何なる人の果なるかと素性を尋ぬ。女房恥を忍びて物語る。その大要は我等は佐野源左衛門經世夫婦が成の果なり。未だ世にある時、夫經世が北條相模守時賴公に從ひ在京中經世の父は何者にか暗殺せられ、加之所領は伯父源藤太經景に押領せられてこの有樣なりとなり。出家あはれと聞く折柄、東天白み初め明方近くなりければ旅僧暇を申して立ち出でんとす。折柄源左衛門經世敵源藤太を討ちたりとて喜び勇みて歸る。旅僧これを聞き喜び我こそは最明寺時賴沙門なり一夜の謝禮に所領得させんとて、燒火の松竹梅に緣ある三ケの莊を安堵せしむといふ節。

此の段は謠曲　鉢の木を作り替へたるものなり。鉢の木の事蹟は北條時賴の逸話として多くの人の

知る所なり。時頼諸國を行脚して民情を察するは、民治に熟心なる爲政者として敬服すべく、佐野源左衛門夫婦が落魄して米炭の資にも窮する身ながら甲冑弓馬の武具のみは失ふことなく大義を忘れざる誠心は眞に武人の龜鑑とすべし。

軍法富士見西行

靱貫切腹の段

平則清の臣に靱負といふ忠臣あり。妻をお六といふ。平家没落の後、姫六代君を隱匿ふ中不幸にして靱負は盲目の身となり、貧苦に陷る。詮方なくしてある日女房お六を傾城に賣る約束をなして家に歸り、妻に仔細を語る。お六健氣にも承諾す。夫婦の間に離別を惜む愁歎ありて、お六一間に入り、用意を整ふるに忙はし。間もなく轡屋勘吉といふもの、迎の籠を舁かせて來る。女房之を知らず。六代君代りて籠に乘り靱負に別を告げて去る　靱負は盲目なれば當然女房の去れるものなりと信せり。靱負悲歎のあまり持病の積を起して倒る。女房一間より走り出で〻介抱す。靱負正氣づけば妻あり、驚きて仔細を問ふ。妻も不審り一間を見れば六代君既にあらずして一通の書置を殘せり。夫婦驚きて開封すれば、巳等が貧苦を見るに忍びず、お六に替りて川竹の浮身に沈まんとなり。お六後を追はんと走り出づる時しも、鼓判官の弟十郎貞直といふもの、六代君を召捕に來る。夫婦種々に辯ずれども聽かず、無理に家搜をなす。折柄、中右衛門といふ者、六代君の首渡さんとて稚子を宙に吊して出

づ。女房驚き縋らんとす。中右衛門お六を蹴飛ばし、稚子の首を討つ。靱負溜りかねて自害す。十郎貞直首を持ち中右衛門を引き連れて歸る。所へ齋藤五郎（お六の兄）姫君を請取らんとて來り、この有樣に驚き駈け出でんとする一間より最前の中右衛門、實は手塚太郎光盛「六代君は御安泰なり」と呼ばりつゝ傅き出で、最前の身替は靱負夫婦の子音石なりと語る。靱負夫婦は我子が身替となりしを喜びしが、一面愛着の涙に咽ぶ、是に手塚の太郎、已が幼少の時、お六兄弟の父齋藤別當實盛より受けし恩義の物語をなす。（源平布引瀧實盛物語の段參照）實盛は後、手塚の太郎に討たれたるを以て、五郎のためには現在父の仇なれども六代君を助けらし恩義あれば、報復を後日に約して別るといふ節。

靱負夫婦が十七年間貧苦を忍びて六代君を隱匿ひし絶間なき忠義心、六代君が其の恩に感じて身しき川竹にまでも投せんとせし健氣さ、手塚太郎が舊恩を思ひて敵の六代君を救ひし義心、一として敎訓ならざるはなし。

宇和島天神記　養老の瀧の段

某城主の忠臣、山邊清兵衛なるもの惡黨大橋右膳のために三が浦にて暗殺せらる。清兵衛の妻初音、及び老母の二名は百日の斷食をなし、養老の瀧に浴し一身を捧げて天神に祈願し清兵衛の仇を報せんとす。其の滿願の日に至り、忠僕銅助は清兵衛の一子幻少なる清之助といふを伴ひて遙々養老に至り

母及び祖母に對面し萬斛の涙を以て別る。此の時惡黨の捕手大勢清之助を奪はんとして顯はれ來る。銅助戰うて之を追ふ。歸り來れば清之助は最早在らず。銅助無念の餘り怒眼血を濺ぎ、鐵拳を握れば山中鳴動し兩女顯はれて銅助にいへるやう、我等が願天神に通せりと、銅助面を上ぐれば火となりて消失す。時しもあれ、忠臣越智武右衛門清之助を伴ひ、同妻瀧野は城主の若君を抱きて現はれ銅助に向ひ、惡黨謀叛の次第を城主に言上し若君を入城せしめばやと談ずる時、再び以前の捕手襲ひ來る。兩人働きて之を縛し、大橋左膳が謀叛の逐一を白狀せしめ敵討に出發すといふ節。

冒頭に養老の瀧の由來を記したるは、人の子に孝道を勸むる作者の用意なり。銅助が主人の遺子を負うて深山を辿りつゝ教訓する言語の切なる、清之助母に逢ひて別るゝ時「侍の子は未練に泣かぬものなり」と健氣なる言辭、皆教訓となすに足る。

蘭奢待新田系圖

幸內住家の段

此の段頗る錯綜せり。依て先づ段中に顯はるゝ人物を表示すべし。

幸內（實は備後三郎高德）
妻 ＋……
彌太郎（先妻の子）（別名小山田太郎高家）
＋
妻磯波
助一（別名妻鹿孫三郎長宗）
＋
おそね

新田義貞
勾當內侍
雛の宮（後醍醐天皇の皇子）

備後三郎高德、元弘の亂より身退き名を幸內と替へ田園に其の日を過す。勾當內侍と雛の宮とを隱匿ふ。足利尊氏亂をなすに及び幸內を用ひんとす、幸內固辭して受けず他日二子の中一子を御味方たらしむべしと誓ふ。話頭轉じて幸內の長子彌太郎腕白にして八歲の時家を出で、絕て音信なし。會々新田義貞危しと聞き次子助一を身替にせんとして陣中に送る。助一臭怯にして遁げ歸りたり。是より先長子彌太郎の妻なりとて磯波といふもの來り、夫彌太郎足利尊氏に仕へ今日の戰陣に敵の大將新田義貞を討ち留めたり。その功により勘當御免をと請ふ。幸內は心に次子助一をば長子彌太郎が討ちたるなりと思惟し苦慮甚し。然るに事實は全く違ひて彌太郎なりと名乘り來りしは新田義貞にして、義貞の身替となりしは長子彌太郎なり。彌太郎の妻磯波は內侍の身替となり、而して臭怯と見えし次子助一は父が尊氏と約せし言葉を履行せんため尊氏に屬し、茲に父の爲兄の爲に圖る所あり。卽ち兄彌太郎夫婦が義貞及び內侍の身替となりし贋首を持つて大音上に新田左中將義貞、勾當內侍二つの首妻鹿孫三郎長宗（助一に同じ）討取たりと、呼ばるや攻勢悉く引く。是に於て義貞、內侍と雛の宮とを守護して落ち行き給ふといふ節。

幸内の長子彌太郎夫婦ともに主君の身替となり、壯烈なる最後を遂げしは忠誠無二、といふべく、次子助一は父が口約を踐まん爲めに逆臣尊氏に從ふと雖も心常に大義を忘れず、後醍醐天皇の皇子雛の宮、新田義貞、勾當内侍三方の虎口を遁れしめたるは忠孝共に全き壯擧といふべし。又助一の妻おそねが卑怯の夫を庇ひ夫の功を立てしめんとて「妾の首は内侍樣の御身替、和君が手に懸けて給べ」とて潔く自害しるは。何等の忠節、將何等の愛情ぞや。而も夫は敵方なれば兄の妻磯波を討ちしことは、兄の手柄を樹てしむる廉潔の所爲といふべし。

娘景清八島日記　日向島之段

惡七兵衛景清は盲乞食となりて日向國海岸に漂浪するも、尙平家滅亡の怨を報せんとの心は一刻も去らず。爰に景清の女に生後二歲にして別れたる糸瀧と云へる者ありて、右次大夫と云へるものに伴はれ海路より此所に上陸し、景清とは知らず盲乞食に逢うて景清の所在を切問するも景清答へず。里人の案内により、初めて其景清なるを知りて之れに縋がり付き、昨年相模の豪農へ嫁せしが、父上をして仕官し安心せしめん爲め入用の金子（實は僞はりて身を遊女に賣りて得たる金子なり）携へて來りしと述ぶ。景清大に怒り賴朝領内の土百姓に嫁すとは何事ぞ、我家名の汚れなりとて娘を打たんとす。娘は已むなく金子と書狀とを其處に投げ棄て乘船歸路に就く。景清里人をして其殘せる書狀を讀ましむれば豈圖ら

んや父をして安く一生を送らしめんが爲め身を遊女に賣りて得たる金子を贈れるなり。景清大に驚き悔て曰く頼朝の榮ゆるは仁義の爲め、平家の滅亡は不善の爲め我れは積惡の爲めに娘を汚さしめたりと。里人此に於て名乘りて曰く予は鎌倉よりの隱目付天野四郎、土屋郡内なり。景清改心して頼朝に從はゞ、娘も身を汚すを要せず。頼朝も亦喜ばんと、景清之に服す。天野四郎海邊に行き船を招き、俱に共に目出度く上洛すと云ふ節。

惡七兵衛景清の忠勇と糸瀧女の孝心と活躍見るべきものあり後段景清の改心する所私情のためとはいへ快心の事どもなり。

日露戰爭記

薫梅忠義魁

梅原健三住家の段

河内國四條畷の近在太秦村に貧苦に暮せる梅原健三といふ者あり。両親及び弟妹を殘し、海軍兵として八島艦に乘組み出陣せり。父は病に臥し貧苦愈々逼る。或日、健三旅順海戰に戰死すと夢む。覺めて女房と語り合ふ折柄、家主上田與次衛門入り來りて健三が決死隊の中に入り名譽の戰死を遂げたりと報ず。父驚き悲むといへども、一言も未練の詞を出さず。名譽の戰死なりと喜び叫ぶ。母と弟妹とは泣く。家主も同情に堪へず涙を浮べて夫婦を慰む。折柄悴健三より差出したる郵書到着す。其の文意は常々父母の教訓を守り、一死國恩に報ずる覺悟なること、決死隊を志願して仁川丸に乘組しこと先

立不孝の罪を許されよなどの事にして、次に父母の御身大切になされたきこと、弟妹は兄に代り父母を大切にすべきこと等細々と。書き連ねたり。最後に辭世あり。

玉の緒のよしたゆるとも我が魂は
鬼ともなりて仇を破らむ

家主も聞いて感嘆し、健三の忠義を楠公に比し、その忠死を嘆賞す。母尙更に泣く。父、母を叱す。所へ豐野の村長入り來りて正式に健三の死を報じ、且つ東鄕司令長官並に八島艦長坂本大佐の慰問狀を渡す。又齋藤郡長來りて山本海軍大臣よりの慰問金五百圓を渡す。其の他新聞記者、婦人會員等各各慰問を送るといふ節。

此の段最近の戰役を經として叙したれば能く時代思想に適せり。軍人として又軍人の親として忠君愛國の赤誠紙面に溢る。家主與次衛門の同情、後援國民の任務亦かくの如くならざるべからず。軍人と後援國民と兩々相俟つて初めて戰果を全うし得べきなり。